

J2.99:7

7 of 20

Aug. 1944  
Vol 2, no. 6

67/14  
C



000

ボルトン  
文藝

5

5

5

八月号





ポ ス ト 文 藝

八月目次

閑かきや

清水の音の

聞ゆなり



夏之夜(表紙)  
繪カ  
原ツ  
卷頭  
言板

惜別

屎尻文學  
文字の解剖  
幸福なる生活  
教育管見  
隨 沙漠感傷  
朝のひと時  
想 秋 隣  
マシザナ風景  
流轉の生活  
挨拶

進藤母水画	山越信雄画	進藤舟水画	瀧井生筆	矢形溪山	安本時子	長谷川蒼逸	谷川江浦草	長藤行精	貴家奎子	有田 百	北村利恵	安本時子	外川 明	土屋天眠	阿世賀紫海	ボーグストン
1	1	1	1	12	14	36	4	26	16	21	36	38	52	28	30	2

詩と俳句

ポストン逍遙

窓のスケッチ

母の 日

短歌

俳句

川柳

作歌に志す人々

小説と歴史

日米情話

源義家

流れゆく水

編輯後記

美紗子

あきら

無 隠

長瀬勇選

和氣湖月選

島原潮風選

永瀬 勇

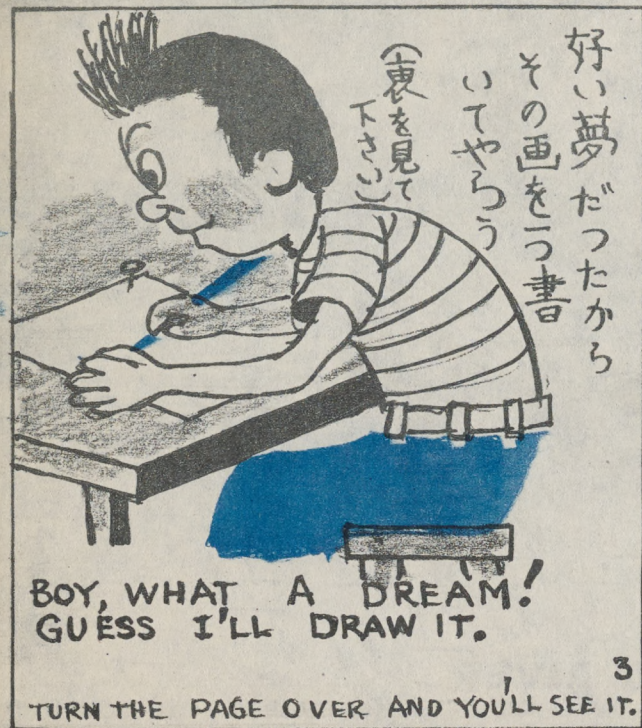
丁村正敏

長谷川 生

松原信雄

41 34 33 56 65 33 10 20 10









COLORADO RIVER

コロラド河


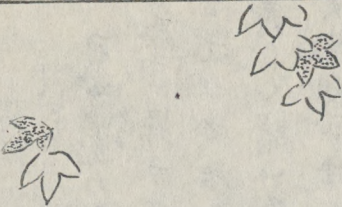


### △朝の想念▽

目が覺めるとベッドを蹴つて跳ね起きた彼は屋外に出た。既に太陽は東の空に昇つて居る。庭の柳の緑葉はその朝のあたゝかい陽光を浴びて燦然と光つて居る。足下を見ろと昨日追咲いてゐなかつた草花は、今朝はもう美しく開いて居る。その草の傍を蟻が二三匹動いて居る。何處からともなく微風が快く彼の頬を撫でて行く。

『あゝ、何といふ朝だ。』思はず彼は叫んだ。凡ては興へられた生命の道を素直に受け容れて、その歩みを續けて居るのだ。俺は今日こそ、せめて今日一日大でも心静かに、不平を唱へず、人を非難せず、他の罵聲やデマに心乱される事なく、唯人を益する事をのみ考へ、さうして他に歎はれる善事をしよう。不満の念に苦しみられ、不平を鳴し、人を攻める心を抱いて生きた日は最も不愉快な日であつた。もう今後、さうした不幸な日を再び繰返したくない。そんな事を獨り想つて居ると、カーン／＼と朝餉を告げる鐘の音が聴えてきた。同じ部落の人々の食事をつくる爲めに、毎朝自分よりはずつと早く起きてくれるメスの人々に對する感謝の念が油然而湧いてくるのを覺え乍ら、彼は同胞の列に加はつた。(N・M)





For most of us the coming of the summer heat marks the beginning of our third year in Poston. We have seen the bare and dusty ground spring up with green trees and fragrant blossoms. In our lives we have restored some of the appearance of normal living; but beyond the green trees are the tar paper roofs and when we examine our community we know that Poston is not like home nor does it seem the place where we would have chosen for ourselves and our children.

For each of us as we face the future there are many difficulties and many things that we do not know. But if we are to create the kind of future that we want, it is necessary to face the difficulties and to penetrate as much as possible the unknown. Only by our own efforts can we make the world a little closer to our heart's desire.

WALTER BALDERSTON

Supervisor of Community  
Activities







# ポストン文藝への詞

ウォルターボーストン

灼熱の盛夏の訪れとともに私どものポストン生活も早や第三年目に入らんとして居ります。

曾ての荒蕪黄塵の地も今や緑したる樹々と香<sup>かほ</sup>はしい色とりぐつ花に満されてゐます。

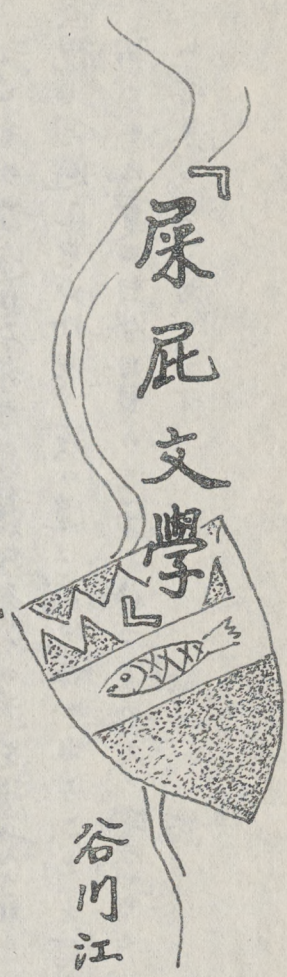
係し翻<sup>ひるがへ</sup>つて考へまするに、かの真黒いターペーパの屋根、そして私ども現在の社會は、なほ吾々自身や吾々の愛見を安んじて枕するには、程遠きかに思へるのであります。

私どもの前途は今なほ多難なる茨の道を豫想されますが、その困難を直視し回避しない所に、茨の道は截り拓かれることを信じて疑ひません。私どもは實に自分自身の努力に依つてのみ、豊富なる心の世界を築くことが出来るのであります。

終



# 『屎屁文學』



谷川江浦草

ひと頃何々文學と銘打つた文學が流行つたことがある。

曰く癡文學、曰く戦争文學、曰くルポルターゲエ文學等々中々賑やかなものだつたが、別に屎屁文學など、云つたやうなものがあつた譯ではない。火野葦平が、第三回目かの芥川純文學賞を受けた時の作品が、『糞屎譚』であつたが、それとても糞屎文學などと流行の銘を打たれたことはなかつたやうである。

ニ―チエだつたかこんなことを云つてゐる。人間はどうすることも出来ないある弱点のため、思ひ切りウヌボしることが出来ないのだ。即ち廁に行かねばならないと云ふ弱点のためと。『出ものはれもの所きらはず』などと、こと更なるおぼかな程、人間は確かにこの打ち勝ち難い弱点に氣附いてゐるらしいが、ある作品、ある作家の本質的價值を決定する標準が觀念論者の、『普遍的な美』でもなければ、所謂『正しい美觀』でもないとするなら、斯うした自然の客觀的心理とも云ふべきものを、正しく反映した作品或は作家があつても、よからうと思ふのは強ち私ばかりではあるまい。その意味に於て、文學



が屎なり屁なりをどの様に捉へてゐるかを見るのも一興で、今夜りにそれらの作品を『屎屁文學』などと名づけてみた譯である。

それは兎も角として、斯ふしたモチーフは何と云つても扱ひ良い、代物ではない。リヤリズム以外の作家には、寧ろ荷厄介であらう。ところが稀れには例外もあるもので、『宇治拾遺物語』にこんな話がある。

藤原大納言卿が、『いまだ殿上人におわしける時、色好みなる女房と語りいて、夜更くる程に月は明るよりも明るかりける』と云へかねて引き寄せたり、『あなあさまし』と云ふ拍子に女が大きいおならを一つおとした。大納言卿はこれを聞いて、『心うきことにもあいぬるかな。世にありて何かはせん、出家せん』と悲觀してしまつた。ところがつう／＼考へて見るに女に屁をされたからと一々坊主になつてゐては切りがない。そこで君子危きに近寄らずと思ひついたからスタコラ逃げ出した、と云つたやうなものである。これと殆ど同じ構想を持つた近代の作品を次に紹介しやう。不良少年が『タフな女を口説くところである。

(作者名失念)

『その内に女の髪の匂や、妙な暖い肌の匂が彼を包んで来た。——と思ふと彼の顔へはかすかに女の息がかゝつた。一瞬間——その一瞬間が過ぎてしまへば女は必ず愛慾の嵐に、二人以外の全世界を忘却してしまふに相違ない。』と男が自信タツプリになつた。此の際どい刹那である。女が一發途方もない快音をあ



げてしまつた。その爲に嵐の一瞬は過ぎ去り、折角のエロ氣分は霧散し、男は手も足も出なくなつてしまふ、と云ふ筋である。以上の作に於ては屁は極めて重大な役割をつとめ、女におならをさせなくては、この小説は成り立たない。之に及し矢張り女が放屁する場合であるが、屁をしなくとも差支へない、併しそれが小説の山として取扱はれてゐる作品を見てみよう。石坂洋次郎の作である。田舎中學の闊達な先生が、年上の女學生と自轉車の相乗りをした中學生を取調べる場面である。

「フウン、その時お前はうしろに棄つて居て、どんな氣がした？」 「どんな氣もしねえでかス。たゞ……」 「たゞ——何ぢやい。」 「たゞオラあやの尻は、下りえ太と思つたス。」 「莫迦！ それから二人でどこへ行つた。」 「それから大福を拾銭がと買つて来て二人で草ツ原い寝ながら喰つたス。」 「何！ 寝ながら？」 「怪しからん——僕の寫實的訊問はいよく、これからぢやテ、正直に白狀せんけりやいかんぞ、それからどうした。」 「みんな喰つてしまつてから、あや子が、オメー、嫁御をもらふ時にや、オラよりよっぽどキレイな女<sup>め</sup>もらふんだぢなア——つておひやした。」 「ウン、それで？」 「オラそんなこと知んねえ、もつと大福喰いてえすつておひやしたら、あや子が、阿呆こくでねえだよ、誰が大福の話しなと云つたよつてオラが肩をドンとどやしつけやした。」 「それからあや子が、もつとオラをそばに寄んなネ、オメの眼は何てきれいなんだらう、耳だつてとてもいゝ



格好だべつてゐた。『ウーン、それから？』『オラのお腹大けえだろ。あんまり大福喰つたで。ソーツと觸つてみなつてゐた。』『お前どうした？』『オラ觸つた。』『怪しからん！ だんぐ本音を吐き出し居るな。そこでお前あや子に濃厚な言葉でもかいたんだろ？ 有体に自狀するんだ。』『オラ只オメの腹にや赤坊が入つてゐるでねえか？』『オラただけだ。』『莫迦！』『先生、あや子も馬鹿こくでねえだ。子供にくせにヨつてゐひやした。』『さうだらう。それから？』『それから、あや子の乳にオラの手をのつけて。』『ホレ、オラの胸ドキ』『鳴つてゐたらう。』『オメどうしてだか分るケつてきやした。』『ウーン、相當の濡れ場だ。』『で何と返事をした？』『オメ！ 心臓悪いケつてゐひやした。』『莫迦！ 實に話にならん奴ぢや。』『先生、あやもさうゐた。』『そしてアーつてあくびし乍らエツクリ尻をこいた。』『莫迦！ そんな大事なこと尻をこく奴がどこにある。』『先生、オラがこいたでねえでが。』『莫迦！』と云ふ様な次第で折角息込んだ先生もがツカリしてしまふ。

この外、ブルボン王朝のさる花の如き貴婦人が朝野の貴顯を招いて園遊會を催した時、『皆様、今日の催しの拙きアレルドとして私のツランペット獨奏をお許し下さいませ。』と漱やかに一揖するや數發の連續發射を試みて、ヤンヤの喝采を博したなどと云ふ、まるで捏造としか思へない様なフランスの小説がある。併し現代から見れば、非禮も甚しいと思へるこの茶番もあの當時にあつて



は、何の不思議もなく受け容れられてゐたことは或る種の文獻に示されてゐる所である。まして鋭い機智を生命とするこの國の人々にはこれは確かに蓋然性を通り越した事であつたかも知れない。樂園を喪失して以來の人間社會にも、斯ふした時代があつたかと思へば、自ら心もほぐれてゆく様な氣がする。

この邊で原の語に移らう。

こゝの傑作は何と云つても芥川龍之助の『好色』と火野葦平の『糞尿譚』に先づ指を屈するであらう。

『好色』の筋は斯ふである。平中と云ふ平家の公達で自他共に許した色男がある。これがどうした譯か侍従の局と云ふ才媛にだけは振られ續けで、振られれば振られる程、相手を忘れかね終には氣も狂はんばかりになる。

平中は長い息をついた。『侍従を忘れる手筈は一つしかない。それは何でもあの女の浅間しい所を見つけることだ。侍従とてもまさか吉祥天女ではあるまい。不淨も藏してゐるであらう。それ一つさへ見つければ、おれは侍従を征服した事になるのだ。大慈大悲の觀世音菩薩、どうか侍従が河原の女乞食と少しも変らない証據をお示し下さい。』と云ふ譯でフト思ひついたのが侍従の大便を心ゆくばかり眺めたら侍従にも愛想がつきやうと云ふ苦肉の策である。侍従の女童が赤い袴を引き乍ら今こちらへ歩いて来る。繪扇の蔭に何か筐をかくしてゐるのは侍従の糞を捨てに行く所に違ひない。平中は脱兎の如くとび出して筐を引



つたり人々の居ない部屋へ飛び込む。「さうだ。この中を見れば百年の戀も一瞬の間に消えろつた。」と平中は殆んど氣違ひのやうに蓋を取つた。が、豈はからんや侍従に見事裏をかゝれ、蓋には薄い黄色の水がたつぷり半分程入つた中に濃い黄色の沈香木が二切れ浮きつ沈みついてゐる。侍従は平中の算略を破るやうに、香細工の糞をつくつたのであつた。「侍従！御前は平中を殺したぞ。」と叫ぶ乍らあはれこのドンファンはバツタリ例れる。

こゝに於ては、ニエチエの所謂、『劇に上る人間弱点』は遺憾なく前面へ押出され、神を試みんとして常に自ら墓穴を堀る人間の姿が、生々しい迄に浮上つてゐる。造り主と造られたるものとの冷い距離が、こゝにも我々の前に立ちはだかつてゐることをマザ／＼と見せつけられるやうだ。

最後に『糞尿譚』であるが、この作品は何と云つても、其手法に於て斬新さを見せてくれる。今こゝに引例する材料を生憎と持ち合はせてゐないが、俗に汚穢屋と稱する便所汲取人が、家々の汲取口から犀利な目を以て人生を社會と觀するものである。糞尿にとつては、もう糞尿そのものは、『人間の弱味』であるよりも、社會を寫す玻璃鏡として尊い存在となり終つてゐる。刺ある鞭を蹴やうとしなさい。彼の勇氣と云はふか、しぶと云つたものが糞尿とがツケり四ツ相撲を取つてゐるところは所謂、『屎尿文學』に止めを刺すものではあるまいか。

(終)





散文詩

ポストン逍遙

芙紗子



雨風も凌ぎ難い小屋を立て、立ち葵など美しく育て、乾いた香りのするメズキド・ツリーの林の中に、暫しの隠道を試みる人がある。

蜻蛉は水底に影を落す。

過去を忘却に、明日を知らない小鳥は楽しさうではないか。

今はすでに忘られた流行なれど、鼻眼鏡などがけ、アエンウツドを磨てぬる人もある。

巻の論客は涼み臺に作戦を練る。

「まあ、あんなことを言ひやがるんで、憎らしい言うたらうの……」  
何を思ひ悩むのか女性の一群。

妻を手押車に棄せて、白い日中の道をゆく老夫婦の胸に去来するものは……



スリツケースを持つて、足早に歩いて行く人の顔は明るい。  
今日を人生の首途と思つてゐます。

たとへどんな困難があつても、がむしやうに生きてゆかなければならぬ。  
取捨のつかない生活意欲があるから。

取り残されたやうなあびしさを味ひ重ねてゆく程に、  
みんないつて終つたとて、政府の方針にそつたわけぢやないのです。

様々に動く人の影に、

悲哀が、喜悦が、苦惱が、

綾を織る。

悟道は。

愚昧は何を型アけん。

笑つちや不可ない。

明日の爲に生きてゐるんです。

明日は未定だと言ふことです。

(終)





の

# 朝の卓

矢形溪山

有名な賀川豊彦氏が、湊川附近の會合に出る時に、草履や下駄を常に片々に  
穿いて行かれた事が多かった。それは賀川氏の處を訪れる人が片々に替へてゆ  
くから仕方なく賀川氏は残りの片々を穿いて出かけたのであつた。

これを見た甲は、此の人は必ず出世する人である。と思つてゐた處数年なり  
ずして、賀川の名は天下に廣がつた。で甲は其豫想の通中した事を誇つて話し  
たといふのである。

渡邊華山先生がある雨模様の日、母は下駄をはいて行けと云ふ、父は草履  
でよいと云つたので、親孝行の華山は下駄と草履とを片々に穿いて學校に行つ  
たと云ふ話もある。

今アメリカの同胞は日本に生れ米國に生活し此の片々の穿きものを強なられ  
て居る處に苦痛がある。

これが朝の卓で、若永さんのお話である。

私が恰も當の問題に悩んで居る時に、竿頭一步の感がひらめいた。と同時に



其の席で、こんな事を考へてメスを出た。

今の自分は下駄も靴もサツクスも 一切の履きものを脱ぎすて、跣足で出かける。女ふのが早道ではないか。

身についたものを捨てるといふ事は、大きな苦痛には違ひない。だが、裸になつて進む處にのみ革命があり、ライフの再建があり。こだわりのない歩みがある。下駄を勧めた父も、靴を薦める母も、詮ずる處吾々の到達する途中を氣遣つての事である。すれば、子のために最善とする跣足で彼岸に達する事に必ず其鳴がある筈である。

ほんとうに裸になつた今の自分は、心静かに沙漠に佇む時に、自ら行くべき道の囁きを感じるのである。

救世軍のブース大將は貧民窟を研究して、貧民の不幸は四分の三までは、自分の招いた不幸であると、おつてゐたさうである。だが少くとも今の自分は、努力して、其窮極が、この貧乏とすれば、人は運命に左右されるといふ決論に達して居る。だが、まだ死の関門をくわつてゐない。死に、ブース大將に反抗するだけの資料は充分でない。それは蒲生君平も、人の價值は「かくれ沼」のよきも悪きも押しなべて、亡き後にこそ定かなれ。となつてゐるやうに、残りの十年に以前に蒔いた種が生へぬとも限らぬ。が、氣力も体力も財力も盡きて



る自分に、ベターリビングが廻轉する事は一寸豫想が出来ない。

只茲に一つの問題が残されてを。

どん底に落ちた時にのみ人生の甦生があるものとすれば、此環境を起点として精神的幸福が克ち得らるゝものならば、正しく個人々々の精神の健闘の、拓いた役得である。この意味に於て、ブラス大將の言葉をかりて云へば正に其人の努力の酬るであらう。運ではあるまい。

ほんとうに、今轉住地の吾々は、此の深刻なテストの前は立つて居る。

六月二十七日 ポストン轉住地出発の朝

(終)

## 矢形溪山先生を送つて

安本時子

ポストン文藝協会の創立者であり、名編輯長として又當地川柳界の先輩として多くの句友其の他の人々から、尊敬され信頼厚かつた矢形溪山先生は二年有余の館府生活から、去る六月二十七日午後八時シカゴへ向けて再轉住をなさいました。



避暑のつもりで行つて来ます。冬には又歸つて来ますよ。と。見送りの一人  
は々に握手して居られた先生の瞳はさすがに寂しうにうるんで居ました。

文藝協會創立以來ニケ年の長い間協會のために其の全身を打ち込んで努めて  
下さつた先生。特に昨年九月以來編輯部の富田、石川兩氏の出所以来多忙な協  
會の仕事に一身に引き受けて献身的な活動を續けて下さつた先生を、今ホスト  
ンから失ふ事は、文協にとつて、又私共柳界にとつて、ほんとに大きな損失で  
あり、嗟歎であります。

機會があつたらう一度外部の空氣にあたつてみたい、と。平常そんな事を漏ら  
されてはゐたものゝ、先生の出発期は確定してはゐなかつたらしいのですが、  
いろんな事情のために、急にニ十七日に定つて名残りのつきぬお別れをしなけ  
ればならない事になり、日頃懇意にしていた私共は、残された寂しさと  
でも申しますか、ほんとに感慨無量で御座います。

行く人、残る人、それ〴〵に環境こそ異れ、ゆく道は一つです。

何卒今後共ホストン文協のために歩調を合せて下さい。

漢山先生、あなたが残して下さつた大きな慰め、私共は先生の努力に感謝し  
先生の努力の跡を偲んで居ります。

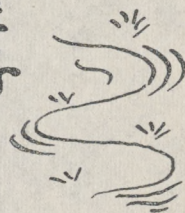
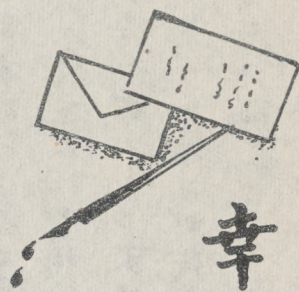
そして暖い冬のホストンで再びお逢ひする日を祈つて居ます。  
最後に先生御夫妻の御健康を祈つてペンをおきます。(終)(一九四四、七、三)



# 幸福なる生活

一友の書簡―ポストン雜記(七)

貴家あま子



けふは何かにつけて 彼が當時より立退きまでの 様々な光景が目の前に現はれるやうに 諸を出されることにはばかり行き當つて 恰ら自分も入り交つてゐる活動寫真の 長いフィルムうかがが 次々にほづれ出して くるのを見てゐるやうである。

立退きのため 他の四五ヶ所の收容所に 散らばつてしまつた友人から 通信があつて それには最初の交換船で 日本へ歸つた子供らの ことなどを訪ねられたりする ことどもによつて 湧き出す追憶の中には 幸福であつたと考へ得るものは 皆無であるときまでには いはれないけれども このたびの急激なるこの変化の 期間内にあつては 怖れ かなしみ 失望 落膽 憤怒 自暴自棄といつたやうな およそ世に忌まはしいものばかりが 跋扈したた眞直中に 喘ぎつゝ生きまつたのである。

こないだ クリスタル シティーへ向ふべく決定した人を 訪問した時その



室内には 寢臺のほかのものは皆荷造りをして 巾かの上に一面に並べられて  
あつた 友人は

「この通りにして毎日待つてゐるのですが まだ出立の日取りの沙汰もありま  
せん このまゝでもう一週間になります でもあの恐ろしかった當時から  
家財道具の始末にとりかゝつた前後のことを 思ひましたなら けふのこの  
心の安さは 以前には考へたことも なかつたことです」  
と話され 主人がタハンがへ送られた當時の 前後に及んで しづしづと詳に  
語りいだされた。

× × × × × × × × × × ×  
「あの友人がクリスタル・シテイへ 着いてから幾日か過ぎたけふ あの日  
に話された友人の ことばもが或る機會によつて ふと浮が出してゐた時に  
夫が入つてきて 私に一通の手紙を 渡したのを見ると それは かの婦人の  
良人から きたのであつた。 左は原文のまゝである

この夢が浮世か 浮世がゆめであるのか と某の詩人は歌ひましたが  
私は全くの 夢心地で世に生きつゝあるのです。

國を離れ……………(このところ知りてあり)……………  
人情風俗からまでも 遠ざけられて見れば 人生は余外氣樂に過されるもの



であります。この頃になつては 兼行法師も斯くやと想はるゝ、せまき居室に詰め込まれてゐますが、寝起きだけならは、まだ二十人でも横はれるだけの餘地があります。衣食住に金錢を支拂ふ心配なく、毎日二十四時間を思ふ存分に使用する特權を得ましたる 今日なれば、決して文句を申すまいと、覺悟してゐます。

私は毎日一文を情報部へ差出す約束にて、特に閑静なる一室に獨坐することと許され、こよなき幸福よと、ひたすら感謝してゐます。申分なき天候、聖賢の書冊、静寂なる居室、妻の手料理、二十四時、猶その上に健康までも頂戴してゐます。オーマー、カ井ヤムが歌ひました梅樂は、正にこんなものではなかつたらうかと嬉しきこと、限りありませぬ。

蘇峯氏が晩年になつて、『人事に倦みて獨り星を觀る』意を韻しましたが、私も年齢は正にそんな辺まで、漕ぎつけてゐます。

滞米四十七年、四十五年間は、加州から一步も踏み出ませんでした。過去二ヶ年間に米州の四分の一を旅して、成程米國は高野原だと知りました。

インターンされたお蔭で、人生に色々な境涯のあることも、覺りました。家族のもの、ポストン在住中は、いろいろと御厚誼を賜ひしことを、感謝いたします。

一九四四・六・一三。

(終)





## 母の日

ハート山 藤岡無隠

○句友濱谷鶴巢子の墓に詣で  
揚雲雀君が御墓の上に啼く。

### ○招魂祭

招魂祭女群は母乎將た妻乎。

### ○川尻杏雨子病を

春愁や又なき夏の病をといふ。

### ○母の日

母の日や叱られし日の懐かしく。  
野花の原漂渺として風薫る。

### ○第四男出征を送る

雷雨やみ清淨の天地その後に。

朧夜や柵を隔てハイウエー。

白骨の何かは知らず焼野原。

高原の風も乃子みて輕懺。

氣づかひし天もいつしか木の芽晴れ。

右左若葉並木の道長し。

まゝこの苦小居成りて夏めきぬ。

大空のホオシサイや稲光り。

夕立ちや天地の雫相應ず。



# 詩 窓のスケッチ

窓々々々

顔々々々

洗濯場の窓々から

碧玉の朝空へ向つて

女達は爽かな汗を拭つてゐる。

窓々々々

縁々々々

食堂の南側の窓には

今日もひねもすゆれやまぬ

エルムとホプラの青葉の交錯。

窓々々々

灯々々々

夕闇の長屋の窓には

緑樹では蔽いきれぬ

青嵐では吹き飛ばしきれぬ

各自異つた明日への悩みが漂つてゐる。







家庭欄

## 教育管見

有田 百

△本誌四月號の、貴家しま子女史がものされた、ポストン雜記(六)アナウンスメント(二)の、至つて浦涵な行文の内の數行に注意しませう。

『過ぎし四十三年度の後半期は私の部落に於て最も外部出働者の多かつた時期であつた。従つてこれらの人々を送る部落長の挨拶に次ぐ拍手の音が始終堂内に響き渡つた。或る日部落長は某氏の死去に就て其の人の追悼の辭及び葬儀、通夜の日取りなどを述べ終つた時に両親と共に卓に並んでゐた三つと五つになる女の子が人形のやうな手で素早く拍手を贈つたのである。(中略)頃はなほ子供等のこんな動作を思ふにつけても今日のかゝる生活状態におかれてある多くの子供等に向つて色々なことを考へさせられる。』

### △大警鐘！

私は兒童のために數萬言を費した絢爛たる美辭麗句の文獻よりも斯うしたしま子女史の、母性の立場から真執する憂を投げかけられた奥床しき行文を大警鐘の乱打として讀む内に胸の高鳴りを覺えた。女史の斯うした憂心に對して子の親として感謝せずにはゐられぬ。



## △模倣性に富む

頑是ない子供の時代は特に知識慾が旺盛であると共に模倣性が至つて強烈である。善と惡の區別なしに環境の一切を無條件に受け入るのが子供の特性であるが故に尊いのである。故に細心の注意を要するのである。白にもなれば黒にもなる。乱暴者にもなれば情け深い者にもなる。荀氏の性惡論は別個の問題としても、  
 じり／＼と後天性を築き上げて遂には一生を支配するに到るであらう。

## △言葉の矯正

四十六ブランクの或父親が筆者にしみぐと話された。

『四歳になる男の子がよく羅府裏町辺りで某國人の下層階級の子供が使ふ實に下等な言葉そのまゝを使ふので、『そんな言葉を誰から習つたんだ。』と聞くことが言つてゐると平然として排斥さるゝのは必定である。一家は子供のために愈々再轉住することに決心した。』と嘆息された。

日常ヤードで賑かに話してゐる子供達の言葉に注意して下さい。實に劣悪な言葉を無遠慮に使つてゐるのには戰慄せずにはゐられぬ。英語の言葉の下劣なるは去ることなるが、親の注意の行き届くべき筈の日本語の會話は如何なるものであらう。

しま子女史は更に語を續けて。

『こんなことを書いてゐて氣のついたことであるが一種特別な日本語を話す在



米同胞の子供等の言葉に少なからず注意を惹かれる。

女史は教養のあるだけ總べてを婉曲に指摘してあるが、心中子供の將來のために痛嘆してゐらるゝことは勿論であらう。子供の言葉は完全に親の責任である。家庭に於て子供が誤つた言葉を以て話をした時には、時間を惜まず明瞭に簡単に、一々上品な、正確な日本語を教へべきである。そして必ず其場に於て訂正した言葉を話させねばならぬ。例へば女の子が、「鐘が鳴った、<sup>ズン</sup>鐘が鳴った、<sup>ズン</sup>メシ食ひに行かう。」と言つたとする。親は直ちに、「鐘が鳴った、<sup>ズン</sup>御飯を戴きませう。」と訂正せねばならぬ。それと同時に、「メシ食ひ。」と云ふ言葉は男子間の用語としても上品な言葉でない事を説明して判然と其區別を解させねばならぬ。

斯くして幼少の時から導くことによつて始めて正確な、そして上品な日本語を習慣的に使用するやうにならう。

元來自己の意志表示を言葉を道具にして發表する以上、上品な言葉を通じてすれば相手方は頗る快感を以て迎へるであらう。言葉の使ひ分けで一生の中には如何程の得失があるであらうか。而して児童の言葉の矯正は社會人全体の責任であることは無論である。子供の前の言葉は慎しませう。

### △赤坊でも悟る

教へることの如何に大切であるかについては、前掲でも冗漫に失する位述べたが今一度自己の家庭の事を擧ぐるのは頗る恐縮する次第であるが道例の一つとして世の母親の注意を喚起させよう。聊か尾籠の話では



あるが私の家内は赤坊に一藝を授けることに極めて妙を得てゐる。赤子が七八ヶ月にもなると、大凡時間を計つておシワコをさせる。丁度時を得ておシワコをすれば良し、若しせぬ時は、四五滴でも出すまで平捧して「シー／＼」と言つて催促をする。又ウンコする頃合ひと思ふと「ウアー／＼」と恰も自分がお腹に力を入れて為すが如く調子を取つてやる。之が日々幾度にも及び又毎日連續するのである。そして四五滴でも落すと口を極めて嘶し立て、ほめては背中を撫でさすつて喜ばす。赤坊もおシメを汚すことの不快を悟り抱き起されて寧ろ愉快に御用をすますことの出来た上にほめた、へられる事が上策だと自然に感念するるのであらう。一人の子は十二ヶ月目に「ウア／＼」と頗る急調で御用を知らせた。他の一人は十一ヶ月目から「シー／＼」と言つて催促した。末子は「ヒン／＼」と言つて十三ヶ月目から知らするに到つた。爲めに母親は御洗濯などに何れだけ助かつたであらう。要するに根氣よく教ゆることの如何に大切にして、導きに依りては赤坊さへる解せしめ得る証左として提供したのである。

### △母の會を設立せよ！

日系人のみによつて構成されてゐるセンターは、米國々民性の特長と日本民族の傳統的長所を旨く組み合せ、名實共に大國民たる、悠々迫らざる上品な奥床しい民族に訓育するには、最適の好機を與へられた事を確認すべきである。故に此の機會を逸してはならぬ。思ふに集團的にも指導如何によつては、人生は一路向上の運命を持つものである。



各ブラツクは獨立した迫力に富む。『母の會』を創立し父兄の熱心なる後援と教役者のサンデースクールと相俟つて一週間に少くとも二回位は児童のために奉仕すべきであらう。之は理想論にあらずして覺悟如何に依り必ず實現し得るものと信ずる。

### △ボーイ・スカウト

戦時下の児童の犯罪率は既に七十二パーセントの増率を見た。平時に於ける児童犯罪の最も多い年齢は十二歳から十六歳位迄である。此の期間の児童の訓練をねらつたのが世界的に亘つてゐるボーイ・スカウトの団体である。ボーイ・スカウトの綱領は不思議にも東洋倫理道德と其の歸を同じうしてゐる。少なくとも各クオード、四ブラツクに一隊のボーイ・スカウトを組織して訓練することが出来たなら、やがて数ヶ月後には相當見違へる程の成績を擧げ得るであらうと信ずる。

### △センターだからエキスキューズ

てふ言葉がある。悪事、情氣、怠慢、の隠蔽語の感ある言葉で、凡そ之れ程不愉快な言葉は少なからう。道德的に良心は麻痺し、民族的に敗退の徴を兆した言葉である。我センターからは断乎として抹削すべき言葉である。

個人的にも民族的にも希望は遠大なるを要す。今や民族試練の秋である。お互に發憤し、協力する前には、難事はあるまい。

(終)

●(子供で遊び戯れる事の出来る人々のみが子供を教育し得る) スクール夫人





# 文字の解剖

長藤行精

ポストンの文藝誌が入所間もなく難境の中からも矢形氏をはじめ同志の方に依つて發刊され、私共の心的且つ又文藝に指導と慰安を與へ盡力されたることを感謝すると共に、本誌が續刊されることを欣喜するもので拙き一稿を以て今御誌を汚すことを許して頂きます。

或る學者振つた人間が文字の解剖にかゝり、『アツマル』といふ字は佳に木ぢや。鳥は木の上に多くあつまるものゆへ木の上に佳を書いて『アツマル』と言ふので集の字が出来たのである。『滑』の字は『ナメラカ』と讀む字ぢや、何がなめらかなといつても水に浸した骨程なめらかなるものはない。依つて三水に骨を書いてナメラカといふ滑の字が出来たのぢや。ものゝ定つて動かぬ事を『必定』といふ。必はカサラズと讀む字なり。俗に屹度といふ事ぢや動かぬことである。動かぬ筈ぢや。心に棒を貫いたのが必の字ぢや。と轉じて居たら、傍うの人が『あなたをやうな事を言つても合はぬ所がある。』と云ふのは『笑』ふといふ字は竹の下に犬だらう。



犬を竹箴へ追込めば、『ゲラ／＼』しきうなもうなれども、何處でも、『ワン／＼』の外はなからう。』と笑はれたと申す話がある。

右の様は學者でせう。二人伴れにて宴會に招かれて行つた。各々席に着きお膳が出ました所、甲の焼物の魚と乙の焼物の魚とは大小の差別がある。甲の先生曰く、『蘇東坡の蘇の字をみるに、魚を左にしたうと右にしたのがあるが、ありや何れが本當でありませう』と。乙の先生曰く、『それは右でも左でも何れでも差支ないのであるまいかと、言ふを聞くや、甲の先生自分の小さな焼物の魚を、乙の大きな焼物の魚と右左に取り換へて仕舞いました。

文字の解剖に學者振つた先生も『笑』の字の竹箴式で行き詰つたと雖も笑の字は竹の下に『笑』の字を書くのが本當の字で犬ではないのだから、難詰した人も學者者振つた仲間と申さねばならぬので、此位の事は何れにしても笑つてすむことなれども、知つた振りや分つた顔では通る事の出来ぬのが我々の未來の行先である。舊信仰(旧宗教)では此節柄面白くないと信仰(宗教)に追、新を振立てるものがある。信仰ばかりは學解と一轍に行くものではないからうと思ふ。

さりとて學解が悪いと言ふものではない。勢至か文殊(智慧第二菩薩)の再來と仰がれた法然聖人の言葉に、『學問は往生』(永遠に生きる悟りの境に往す)の用に立たないと云ふ事を知るは、これ學問の力なり。』とあれば學問もとより必要なれど、信仰を學解で扱ふは考慮せねばなりませんまい。

(終)





# マンザナ風景

土屋天眠

時は陽春四月の一日、私としては  
 此のマンザナの轉住所に移されて来て  
 から、彼れ是れ二ヶ年近くにもなるが、  
 何一つ是と云ふ責任を帯びた仕事を  
 する譯でもなく、只漫然と其の日々  
 を送つてゐる閑散の身であれば、日課  
 としては時に友人方の訪問か、散歩位  
 いが関の山である。

此の日も何時ものやうに、友人から  
 寄贈された、一本の杖に喜壽に近い老  
 軀を托して、足を戸外に運び、西を指  
 して凡そ一丁程も歩めば、此處は北米  
 に名だたる大セラの山麓に沿ふて、屢  
 開されてゐる高原地帯で、以前はセー

が蓬々と生へ茂つてゐた場所を切り  
 開いて、今では「ゴルフ」の遊戯場に  
 提供されてゐる。

北の高原の後を取り圍んで、嚴めし  
 く控へてゐる、大セラの雪を頂いた連  
 峰は、春先のクワキリと澄み渡つた、  
 瑠璃色の空に聳へ立つて見へる。其の  
 壯大なる景觀は一見人をして、爽快な  
 らしむるに足るやうな、自然の大氣を  
 漂はしてゐる。

此の日に限り、大セラの連山の中腹  
 には、むら消へに威つた雪の山肌へ、  
 天津乙女が薄絹の裳を引き延べたやう  
 な、灰色がかつた雲が棚引ひてゐる。  
 其の間を縫ひて黒ずんで見へる、山松  
 の並木が不規則に茂つてゐる。この松  
 の並木に雪を配した眺望の美は、稀れ  
 に見る絶景にて、日本で謂へば四條派



の畫家の彩筆に成つた。一幅の山水画にでも見る様な、壯麗さで、其の中には勿論、大自然の妙趣も、造化の尊嚴とが籠つてゐて、平凡な筆の力では容易に其の真相を表現し難い程の、幽韻が藏されてゐるのである。

此處の東南の方には亦、種苗園や護謨の研究場の設備があり、又、其處から溪流一筋を隔てた南側には、鷄舎や牛豚の飼育場や、柵は亦廣茫漠々たる野菜耕作場の光景などが、一望のもとに這入つて来て、見るからに陽春の麗らかな、風趣を漂はしてゐる。

其處から更に漫步を北に移せば、野末に白く浮き立つて見ゆる慰靈塔や、或は又病院、小兒園や、メリツト公園や、小兒園の端に造られた、日本櫻やサ藤を植込んだ公園があり、更に亦、眼

を東に放てば、柔道場、剣道場、シビツク、セクターは謂ふ迄もなく、轉住所の全景が眼下に集つて来るのである。

それから自分は、ポカ／＼と暖かい夕陽を浴びながら、自分の寓居に帰つて見れば、日頃丹精を凝らして軒下の両側に植付けてある、アネモネやラナシギラやバイオラや、其の他数々の西洋花が、時を得頼に色取り／＼に咲き乱れて、自分の帰りを歓迎するかの様な微笑を湛へてゐる。處へ亦、蜜を漁る蜜蜂や、花に戯むる、蝴蝶の類が、咲き盛つた花の上を、いとも無邪氣に飛び交ふてゐる。その和やかな光景こそは、春ならでは眼に映じ難き、優美を極めた一つの眺であらうと思ふのである。

(終)

● そちこちと水にきく鉄涼しかり (千代女)



## 流轉の生活

ハート山便り

阿世賀紫海



歲月は水の流るゝ如しとやら。住み馴れし羅舟を逐はれて早や春秋二回を送り迎へた。十三臺のバスに乗った私等は、出發直前までマンザナ行きと思つてゐたのに運轉士からボモナ行きと聞かされて、事の意外に驚きもしたが安心もした譯だつた。

### 『送らるゝ身の振り返る棕櫚の花』

ボモナの夏は暑かつた。午後二時頃ともなれば室内の床に水を流し、或は床下に晝寝の夢も見た。然し晝食一時間半前から炎天下の行列は浅間しくもあり辛かつたものだ。而も何やらの注射の爲に列の中から率倒するものを二三人も毎日見受る悲哀は淋しいものだつた。

### 『食堂へ並ぶ三度や初蜻蛉』

最も困つた事は食事と暑氣と煤煙だつた。炎天の下に玉の如き黒煤は日ねもす降り續け室内一面に濁を巻く體たらく、而も顔や両手の黒點は鮮かに豹の如く、サーカスのチヤリーも顔負けする程の滑稽を演じた。

### 『黒雪と思へば涼し屋根の煤』

樂しかつた事は早朝自轉車で所内を一週する快味とさゝやか乍ら家の周圍の庭作りだつた。コーン、菜鶏頭、朝顔、菊など生い茂る中に菜種や雞鬘栗の咲きほこる様には、毎日鑑賞者の嘆聲が續いた。

### 『葡植えて朝な夕な水注ぎ』

『あすの日も知らず伸びゆく若葉かな』

胡桃の實青を頃、ハート山への移動が始まつた。毎日五百余名免護送さるる光景は悲壯なものだつた。ボモナへ最初入所して最後迄居残つた私は見送



りに多岐を極めたが、この旬日の心境は筆紙に盡せぬものがあつた。

### 『秋立つや心淋しき旅支度』

廣漠とした山野の汽車の旅。それは私の最も好む快挙であつた。殊に無燈の車内から名目を仰ぐ風流は千金の價値であり現實の夢の世界であつた。又或る時は小川に繁る青柳、湖水の鳴の浮き沈み等、食堂車の窓から展望する情景は忘れ難き樂しき思ひ出である。

### 『長旅に飽かぬ眺めや秋の川』

### 『層雲に月は隠れて秋しぐれ』

### 『朝寒や線路に遊ぶ雀の子』

夢に夢見る快心の旅を續けて恙なく汽車はハート山へと到着した。ホット吐息をついて眺めれば是は又何とした荒涼たる原野である事か？、腦裡に描いた森林はおろか一樹の影だに無い廣漠とした高原、然も一面セーゲが原に波打つ丘、西には奇形のハート山、南

には山肌赤き山骨陸々とした砂岩山……噫神様と口走つたのは私一人では無かつた筈だ。

### 『高原に並ぶ長屋に秋日和』

汽車を降り重き足を數十歩の所から當地特有の突風は砂塵を巻き上げ、帽子を飛ばし、地より小荷物を埋め、いやや言語同断、寸尺を辨せぬ慘憺たるものであつた。

### 『汽車着くやハート高原秋嵐』

心ならずも當分の假住居と思へば、家の周圍のセーゲを初り、カクタスを垣り捨て、小庭をしつらへ種を蒔き、朝な夕な水注ぎ、日没頃ともなれば床下にひそむ鬼は彼方北方にひよんひよんと飛び廻る。遊ぶもの捕ふるもの、或は鈴蛇に悲鳴を擧ぐるもの、茲荒漠の地にも相當の樂しみは有つた。手塩にかけた植物は成長して美はしき花の乱れ咲き、やがて秋とはなつて来た。



『高峯を背に千軒の秋の月』

無味乾燥のお地と思わつた。このワ  
イオミング州は新道に名高き化石の産  
地であり、殊に處女地であれば前人未  
踏とも謂ふべく、木ウ化石、貝類、海  
草類、獸骨、牙等學界参考品として貴  
重なる化石は續々として蒐集されたい  
であつた。

『秋晴れや人波つづく化石屢』

九月十三日遙かに見ゆるロフキー連  
峰に初雪あり。同十八日には我等が長  
屋にも一面の銀世界、窓に萬葉の牡丹  
雪。この絶景たるや加州に於ても故郷  
に於ても見られぬ壯觀であり、快事で  
あるが、日本風呂から我家へ五十歩の  
距離に濡れ手拭は夜うやう凍ること再  
々であつた。

『寒月の西に残れる日の出かな』

鼻は著ち、耳は千切れの凍傷の噂も  
何のその。アイス・スケーと場の乱舞。

青年男女は胡蝶の如く紅衣をひるがへ  
して嬉々と舞ひ遊ぶ様は是れも壯觀の  
一つである。更に燃ゆる大暖爐の側に  
羽化登仙の夢をむさぼる一醉の夢も思  
くはないものである。

『降りてく雪に暖爐の夢路かな』

『靴なるや北背をまろくと雪頭巾』

五月になつても雪が降る。九月にな  
れば又雪だ。降雨は云ふに足らず、春  
雷の音も柔かに夏となる。

『春雷を吹き飛ばしけり西の風』

渾沌とした古界動乱も食ふか食はる  
るまで續くであらう。男命の續くまで  
攀げた拳の体面上、納まり着かぬ今の  
仕儀であれば、我等も泰然と腰を据え  
飽かぬ眺めを胸一杯に、冥土の土産と  
せんのみ。 呵々。(終)

●夜の風を部屋に涼しむわが前に、おも  
むろに揺る、夕顔の花(阿部鳩雨)





## 日米情話

—其他—

中村正敏

ヤアー来たね。若い者は何時見ても  
元氣懨懨たりで宜いワ。何、ワシか、  
老いて益々旺人なりぢや。が古ミシ  
ンと同じで其所此所故障はあるノ、  
アッハッハ……。時に今日は何事ぢや。ウ  
ーム、サールホド文藝雜誌、こいつは  
結構ぢや、老人大賛成ぢや。今の時世  
を見るが宜い。太平洋も大西洋の水も  
唐紅に染まり相ぢや。毎日の新聞のト  
ップを飾るものは何人殺した、何万噸  
の爆弾を落して損害を興へたと云ふ阿  
鼻叫喚の報道ばかりぢや。之れぢや何  
んば暢氣者でもたまらまい。神聖衰  
弱にならぬのが不思議な位ぢや。こ  
んな時には氣分の轉換が必要ぢや。人

心を笑はする様に持つて行かにやいかん。  
こゝした意味からも、現在おストン  
でやつてゐる、各位の素人芝居、素人  
浪曲、筑前琵琶其の他種々の催し、又、  
君達の文藝誌とおふエ合に、一は大家  
を喜ばせ又、それぐの趣味に没頭する  
フちう事は、ワシは何よりも賛成で感  
謝する所ぢや。益々盛んにやつて欲し  
いの。

此の間素人浪曲で田中君の「唐人お吉」  
を拝聴したが節廻しと云ひ音聲と云ひ  
立派なもんぢや。時も時思出深い演題  
ぢや。米艦浦賀に砲声一發、徳川三百  
年の夢は破れて攘夷ぢや尊王ぢやと上よ  
下よの大騒動。かゝる所に集り込んで  
来たのが、米國初代領事のハリスさん。  
下田美人のお吉さんとのロマンス。  
こいつは物になるね。作家連中が黙つ  
て置くわけはない。小説に戯曲に浪曲  
にて唐人お吉は日本國中にその艶名を



唄はれてしまつたのだ。所が事實は悠  
うぢや。伊豆の下田に日米交渉で名高  
い寺が二ツある。一は七軒町の仙寺  
で安政元年幕府の全權使とペリーと談  
判を重ねる事幾三度、有名な下田條約  
十三条が締結された所ぢや。今一つは  
下田の町はずれて、男浪女浪の打ち寄  
する山裾の柿崎の玉泉寺ぢや。安政三  
年此處が米國最初の總領事館でハリス  
お吉の浮名の宿ぢや。時にハリスは六  
十金歳お吉は二十一歳、新内お吉と呼  
ばれた下田藝者で莫連者ぢや。流石の  
ハリス老人もたまにかねたと見へて一  
週間でお吉はお栞箱になつた。其の時  
の年當が二十五兩。それからお吉は氣  
血が高くなつたのか、排斥されたのか  
日本人なんかはと横濱あたりで異人さ  
んを追つかけて廻して居た相ぢや。星が  
移つてそれから二十数年後、尾羽うち  
枯らしたお婆さんが下田に現はれた。

古老は之がお吉の成れの果だと見破  
つたが、春や昔の影はなく誰一人見返  
る者もなくとう／＼シンデン寺洲に身  
を投げたのだ！。

お吉に比べたらうさつぱり名を為さな  
んだが、お吉と同じ町藝者でお福と云  
ふ十七娘がハリスの秘書兼通譯のヒュ  
ウスケンに抱へられた。ヒュウスケンは  
年も若いし男振りもよく日本語も少し  
は分かるので女に騒がれたさうぢや。お  
福の外に三四人の愛人もあつたらしい。  
安政六年かヒュウスケンが刺客にやう  
れた時はお福は深刻に悲しんだ相ぢや。  
それ程打ち込んで居た譯ぢやう！。  
どうぢやこれは物はならんかつ！。  
今の場合に之などは日米ローマンスト  
して宜い題材ぢやが。イヤ話がドシド  
シ脱線するのーアツハツハ……  
そうぢや和歌俳句文藝時評が、そい  
つには弱つたうー。ワシも二十項に、



女達に引つ込まれて句作ちうもんをや  
つた事があつたがう。今でもかすか  
に覚えてるが、『木の芽吹く頃を目を病  
む女哉』と駄句つて自分では意味深の  
句ぢやと得意で居たら周囲の反響がさ  
つぱりなくての！文に不平を感じた事  
があつたわい。それから志他に変じ透  
には米國業込みとなつて所謂俗事纏綿  
と云ふわいで早急に此京式部にもなれ  
ずの！、アハッ……。こいつが政治論な  
らう。『ボストンの自治制』でも論じさ  
したら文藝誌の一冊や二冊手間暇はこ  
らないがね。がそいつも方面違ひで  
都合が悪からうし。と云つて折角来た  
ものに只では帰されない。それぢや老  
人の面目が潰れるわい。其所で天下一  
品のお産をやる事にしやう。それで今  
度は我漫して貰ふんぢや。

時は今から二十年前。それ以上も前

だと思ふ。東京に日本全國からの民謡  
大會が開かれたう。それは日本各地の  
古来から傳はる地方の唄や踊の大  
競技會ぢや。其時優勝の一ツに選ばれ  
た年末節は全國を風靡した。津々浦々  
に到る迄『箱搦』を知らぬものはな  
くなつた。

遠いアメリカのワシントン社會にまで  
いざ何事といつたら直ぐに箱搦が飛  
び出す有様ぢや。それからの日本のレ  
コード界は俗唄の全盛で何所に住んで  
居ても地方名物が自由にきかれるわい  
ぢや。之は武士道鼓吹に浪花節を奨励  
したのと同じ意味で、都會へと走る  
地方青年男女の引留運動で為政者の  
農村振興策ぢや。

それと是れとは趣は違ふが、ボスト  
ンには日本全國から人が集つて居る  
と見てよからう。地方々々の名物唄や



踊の名人がたしかに居るね。南は沖縄  
縣の琉球節から北は北海道の追分節と  
云ふ風に、各地々々の名物を持ち寄つ  
て貰ふて、競技大會では一寸変なうな  
物大會とでも呼ぶか。是を聞いて見た  
まへ成程疑ひなしぢや。ワシは今から

矢形君を逢ふ

蒼逸

名樹は想えられぬ淋し  
短か夜の夢路通りぬ君と僕  
蛟龍の池中を出づる飛躍なれ

本数利を押して保証しても宜い。い  
ろ／＼の点で意義ある企てぢや。こい  
つを一つ君達の文藝協會同人が請九に  
なつてやつて見るんだ。どうぢや御趣  
向は。アツハツハ………

安未唄ふか、おけきを舞ふか

月に浮かれて夜もすがら

(終)

黄昏る、沙漠の感傷



北村利恵

夕食後とはいへ陽光はまだ烈しい。

六月の空は深く碧い。キヤスタの大葉  
が屋根に揺れる。陽陰に談笑する人の  
目を逃れて柵外を越え、赤蟻の巢の點  
をさけつゝ、野を行けば、熱砂と草木  
のいされとが息苦しさを感じさせる。  
栗の花を聯想する「メズキツド」の  
花盛りは切ない位、御愁の匂ひが身に  
沁み入る。

生花の材料をあさり歩く私は周圍  
の小鳥の美音に耳を傾ける。鳥類も人  
間に附随して棲息するものか、近來期  
節のvariety目毎にいろ／＼の小鳥をよく  
見かける。振りかへり見るバラックは  
悲しくも寂しく靜かに分列して立並び



どこかのマスホールの残煙が糸を引いたやうに風のない空を流れてゆく

集團生活の朝夕の騒音復雜、時に倦怠を感じ山頂にいで、思ひ切りの叫鳴してみたいやうな悲しい刹那さへある。視野の限り雄大にして荒々しいが、廣漠たる沙漠の壯嚴にして心を豊かにのびくした智的な上品な遠眺と静かなる空氣を私は此の工もなく愛する。

入所當時、生活と境遇の世相の激変の爲め、不安の裡にも興奮した神経のその敏感性ゆゑ沙漠にも先住者ありしかと牛馬の糞にさへなつかしさを覺えたが、單調な刺戟のない生活が二ヶ年も續けば人間の順應性と、渾沌たる明日への生活に對する仕方ないあきらめとが人を鈍感化してゆく。

此の生活はこれから何年續くか三年か五年か思へば總べてが未知数の中にある。誰か明日の事を豫測し得やうぞ。

再轉任に拍車をかけて、又はいろいろの意味で今日も明日も青年は丘を越えて出て行く。過去の永い實社界に於ける勞働と生活に疲れ果てたる親達は悲しむべき宿命のやうに惜別の情を胸に抱きしめながら、出て行く者の車の姿が消えるまでちつと見送る。

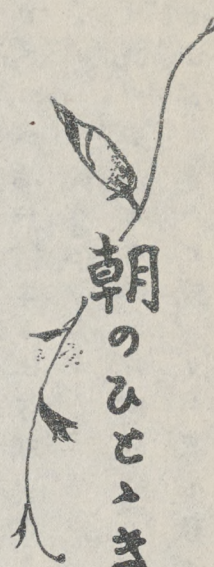
白いきめの細い砂山に「グリスウツド」や、「セイジブラ」があちこち繁茂してゐる。生花と一頃流行つた細工物の材料にあはれ堀りかへし切りくずされた、「グリスウツド」の若木の縁が色鮮やかに育つて居る。

鉄の音にとがけが敏捷に姿をかゝす遠くで山鳩が鳴いてゐる。

●子曰く。道に志し、徳に據り、仁に依り、藝に遊ぶ。

●子曰く。之を知る者は之を好む者に如かず。之を好む者は之を樂む者に如かず。





## 朝のひととき

朝の窓から見わたす七月の空は晴れ  
上つて一點の雲もない。

今までは比較的涼しかったポストン  
も、愈々夏期に入つて寒暖計は毎日百  
十数度を上下してゐる。

何か纏めて見たい慾望を、友人への  
返信も認めなれはすまないと思ふ氣持  
ちで朝毎に机に向つてはみるものゝ  
にじみ出る汗と、蒸し暑い苦しさに何  
をする元氣も出ない。

挨拶ばい風が室内に吹き込んで妙に  
氣持ちをイラ立たせる。

型はつかりの度先に下り立つてみる  
と、無限の天空へとつもない構想が  
湧いて来る。

## 安本時子

常盤木の下蔭を無数の蟻が列をな  
して穴から穴へ忙しうに出入りして  
ゐる。

先日外部に出て行つて空家になつて  
ゐる隣家の垣に朝顔がすく／＼と延び  
て、昨日まではまだ固かつた蕾が今朝  
は見事に開花して帰らぬ主人を待ちわ  
びてゐるかゝ如うに見える。

毎日丹精に手入れをしてゐた隣人を  
偲んで近寄つて見ると、甘い薫が鼻を  
つく。

ふと、私は中で一番大きな淡紅色  
の一輪を手折つて見た。

そして又友人に送つて上げやうと  
思つた。  
(終)



# 武將の風格

(その二)源義家

長谷川生

ハ幡太郎義家は源氏興隆の祖先で、  
勇武の点に於ては素より膽畧あり風格  
を備へ、雅量を有し思慮並に行ふ、實  
に得難き良將の逸材であつた。

曾て彼が關白頼通の前で前九年の役  
の軍功を物語るのを、座を距て、聴い  
た大江匡房が「彼は將才はあれど惜むら  
くは兵法を識らず」と評せしを、義家  
の従者が聞き大に憤り、之を彼に告げ  
たが、義家は「それ或は然らん」と遂  
に禮を厚くし、匡房に就いて兵法を學  
んだのである。

斯くの如きは一見珍とするに足らざ  
る如きも、實際に於ては凡骨の爲し能  
はざる所、孔子は老農を師とすと曰へ

り。斯かる雅量ある人にして始めて眞  
の賢明なるを得べく、義家も此時兵法  
を學がたればこそ、寛治九年九月自ら  
兵を率ひて金澤の柵を攻めんとせし途  
上、秋空高く飛ぶ雁行の乱るゝを見て、  
敵の伏兵あるを覺り、兵を放ちて搜し  
出し之を殲滅することを得たのである。

誠に、徳孤ならず」と云ふべきか。

前九年の役、彼はその父頼義に従ふ  
て安倍頼時及び其子貞任宗任を討ち、  
衣川の柵を陥れた時であつた。

義家は弓に矢をつがひ敵將貞任を追  
ひながら、餘裕綽々として、

衣のたてはほころびにけり。

と和歌の下句を詠みかけた。所が貞  
任もさるもの、直ちに、

年を経し糸の乱れの苦しさに。

と巧みにその上の句を連ねたので、義  
家はその優なるに深く感じ、折角既に  
ねらつた矢を射なかつたと云ふ。



昔の武將の天空懷瀾實に痛快なるものがあつたと思ふ。又此の役に於て頼時及び貞任の戦死せし後、遂に降参した宗任を義家は何故か非常に愛撫した。併し宗任は之に反し機を見て義家を殺し、一族の怨恨を晴さんと密かに志してゐた。折しもあれ故意か偶然か、義家は或夜唯だ宗任のみを側に置き鼾聲高く熟睡したのであつた。瞻何ぞそれ大なる、遠の宗任も大に感ずる所あり、其後は心を翻して大に忠勤を勵みしと云。物語りがある。

後三年の役、彼義家は鎮守府將軍兼陸奥守として、大鍬形打つたる龍頭の冑緋緘の鎧に身を固め、鷹の羽の二十四差したる征矢を背負ひ、重藤の弓を携へ連銭葦毛の駒に跨りて、清原武衡一族を討伐せんと陸奥國を指して下る途中、磐城國勿來の関に差掛つた。

時しも彌生の半ば過ぎなん、爛熳と

咲き誇りし万葉の山櫻花、漸く老いてそよ／＼と吹く春風に、枝を離れて地上雪を欺くばかり、この情麗なる原頭に馬を棄り入れることを躊躇しながら嘶く駒の手綱を引き緊めて、

「吹く風を勿來の関と思へども

道も瀨に散る山櫻花かな」

と詠じた。清く咲き美しく散る櫻花に、吟詠風を怨む漂々しき姿の勇將、まして強豪の武士にも優美の心の顯はれて床しき限りなり。

乱平いで源義家は颯爽と帝都に凱旋したが、何故か廟議は之を乱闘なりとして、官符を下さず又其功を賞せざるに達着し、後は慨然として私財を抛つて大に部下の將士を稿ふたと謂ふ。誠に大將軍の誓咲髪方髻として嘆賞の外はない。

・咲きし櫻の色よりも白ふ心の武士よ。

・関八州の山川は白旗の風に靡き伏す。(終)





# 流れゆく水

松原信雄

『今晚職務上、安井にどうしても會はなければならぬ事がある。』と思つた利那。杉村新治の腦裡には十年前の過去が蘇つて来た。今は安井の妻であり、三人の子の母である勝子は、その當時まだ田上勝子であつて、杉村と勝子とは『兄さん』、『勝ちやん』と、呼ぶつ呼ばれるつしてゐながら、然も二人は未來を約束した仲であつた。

杉村は十五の春、郷里の小學校を卒業すると、その夏父母に伴れられて、憧れの國アメリカに渡つて来たのであつた。さうして始めて知つた異性の友、勝子と彼は兄妹のやうに、親しい交りをつ續けて年を重ねて行つたのである。餘りにも親しかつた二人の頭上、いつか結婚しよふといふやうな、考へが浮んだことはなかつた。だが、悪戯好きな運命の女神は、新治が廿七、勝子が廿二の秋偶然の機會を與へて、二人の心を堅く結ばせてしまつたのである。

その時既に勝子の父は此世に居なかつた。二人の仲を知つた勝子の母は、『ハハが生きてゐたら、どんなに喜ぶだらう。』



さう云つて、喜んでくれたのであるが、新治の両親は二人の結婚に對しては絶對反對であつた。

『新治、お前は二世の娘とは結婚しない。』と、口癖のやうになつてゐたではないか。それに、どうして……』

と、母は泣いて新治を口説くのであつた。

勝子の従兄であり、新治の無二の友である良一と新治は、戀愛の相手がなかつた頃、理想を追ふ若人の例にもれず、滔々として、戀愛と結婚の理想を論じて彼等呼寄青年と二世の娘とは、全然理想的家庭は築けないといふ結論に達してゐた。しかし、戀愛は理論ではない。情熱の火花である。一度戀愛の情火に包まれると、人間の理性は餘りにも無力である。戀愛に酔ふた若い二人にとつて現實の世界は遠い／＼山の彼方の別天地である。二人にとつて戀愛は至上である。戀愛こそは、誠に盲目である。

『兄さん、ドライが教へて頂戴。』

『うん、教へてあげやう。』

或る秋の夜、勝子と新治は緑濃いオレングの木々の間をドライヴしたのだつた。さうしたドライヴの夜が續き、それがいつしか愛する二人のデヨール・ライドに變つてゐた。丁度その頃、新治と日本に在る従妹増美との縁談が持ち上



つて居たのである。

新治の父母は勝子との結婚を断念させやうと、怒ったり、泣いたり、あらゆる手段をつくしたが、それが却つて二人の情熱の炎を熾り立てるのだつた。或る深夜、新治は激しいナツクの音に目を覺された。

「おい、おい、杉村。」

呼ぶ聲は良一の聲だつた。兄のやうに慕つて居る良一。戀と恩愛、義理と人情。何れを選ぶべきか、悩ましい日夜を送つてゐた新治にとつて、良一の訪れほど嬉しいものはなかつた。半年振りで會つた親友、二人は手と手を握り合つたまゝ、暫く言葉は出なかつた。

「瘦せたぢやないか。」

暫くして、新治は良一を見つめ乍ら云つた。半年前會つた時に比べて、良一は過勞の爲か、ひどく瘦せて居た。

「余り無理をするなよう。」

「うん。」

又、暫し、沈黙が続いた。やがて良一は、

「今日パパから手紙を貰つたのでやつて来たんだ。そして、俺は今、パパやママと一緒に時間あまり話して来た。……俺は、君等の結婚には絶對に反對だ。……俺は、とても苦しい。」



唸るやうに、さう云つた良一の両眼は涙で充つて居た。

勝子と結燈せよと云ふ親族のすゝめを、頑強に拒否し通した良一、さうして最近相愛の女、早智子と「正式」に婚約した戀愛勝利者の彼。更にそれより先新治の初戀の人、小枝子も、新治の両親から懇願されて捨てさせた彼。今新治と勝子の戀を知つたのである。

「俺が勝子との結燈を飽迄拒み、さうして、君に小枝子を断念させたのは、君と勝子とを結ぶつける爲であつた、と思はれるかも知れない。さうした卑劣な不義理をした男だといふ誤解から、俺の今度の婚約は或ひは破れるかも知れない。然し、それが眞に君の爲になるならば、勿論俺はかまはないよ。だが、君と勝子との結燈は二人を幸福にする處か、不幸のどん底に突落す事は火を見るより明かだ。君もそれはよく判つて居た筈だ。君等二人と、二人の家庭の事情をよく知つてゐる俺としては、絶對反對する外はない。それでも尚、君がどうしても結燈するといふなら、止むを得ない。……俺は君を失ひ度くない。だが、」

良一の両眼から涙が溢れ出て後の言葉が續かなかつた。

五年前、新治が日本へ還つて小枝子と戀に陥ちた。丁度その時、新治は親族から増美の姉幸子との結燈をすゝめられてゐた。両親もそれを希望して居た。



それが爲、彼は小枝子との戀を秘めたまふ、日本生れでアメリカへ行く事を許されぬ彼女を残して、一人淋しく再び海を越えたのであつた。

小枝子との結婚を両親は極力反對したが、頑として女を捨てやうとしなかつた新治は、兄のやうに敬愛して居る良一から、懇々として親の意に従ふべきであることを説かれ、情に脆い彼は終に女を捨てたのであつた。さうして今宵また、父の手紙を受取つた良一は、早速二百哩の遠路を獨り、車を奔らせて、新治を説得すべく飛んで来たのである。

「判つた。どうか君は早智子と結婚してくれ。僕は、もう再び勝子には會ふまい。」

×高原の秋の夜は静かに更けてゆく。唯僅かにオレンヂの葉末を撫でゆく風の音が聴えてくるばかりであつた。二人の男は對ひ合つたまゝ、泣いてゐた。

その翌日、新治は日本の従兄亀雄に於て、手紙を書いた。……僕は君の妹増美と結婚すべく、一週間後、散港出帆の便船、浅間丸で歸國する。……

更に三日後、新治は良一と早智子の結婚式に列席し、其の翌々日の午後三時、両親を偲り、良一新支帰、そして、それらの人々に隠れて来た勝子に見送られて、日本に向つたのであつた。

御里に着くと新治は最先に従兄亀雄の家へ車を奔らせ、ドアを開けて迎へに出た亀雄は無言のまま、新治の手を堅く握りしめた。五年振で再會した従兄



弟二人の両眼から涙が溢れ出た。やがて亀雄は、

「少し違かつた。君の手紙がせめてもう三日早かつたら……」

初戀人を捨て、さうして弟二人の戀をも断念し、父母や親族の懇望に従つて従妹増美と結婚しようとして、日本に還つた新治は、又もや運命の手によつて増美を奪ひ去られて居たのである。「どうにでもなるがよい」。旅行好きな彼は毎日のやうにキヤメラを持ちて家を出た。

旅行、亀雄も新治も共に旅行が好きで、五年前、新治が帰國した當時二人はよく旅をした。亦、毎日のやうに、晝は山や海に遊んで日本の自然美を賞で、夜は赤い灯の下に、若い女を相手に酒を酌み交して、日本の女を愛した。その當時、彼等の故郷W市ではカフェーが旺んであつた。だが、僅か五年後の今日、彼はW市街を歩いて、その外觀の変化に目を瞠るのだった。カフェーは喫茶店にその地位を譲り、以前なかつたデパートがW市の大通りに三軒も出来て、毎日それらの高いビルは數万の人々を吞吐して居た。然し、その外觀が變化した以上、變つて居るうは内部構造、人々の思想であつた。その頃、全國を燎原の火のやうに風靡してゐたマルクシズムは地下に追やられて、新しい思想、日本再認識の思想が全國を席捲して居た。……日本は急速度で動いてゆく。日本の變化は目まぐるしい。さうして、俺も變つてゆくのだらう。俺の明日は、俺の明後日は、……運命だ、運命だ、運命に任すのだ。……彼は獨りさう思い乍ら



毎日のやうに街を道達した。

すべての事情を知り、さうして、誰よりも新治を最もよく知つてゐた亀雄は勿論、新治の近親者は、彼を自暴自棄に陥れまいと心を痛め、米国生れの娘との見合をすゝめた。

『皆がよいと思ふ女、それが、運命が僕に與へてくれた女なのだらう。皆がよいと思へばそれで結構ぢやないか。』

さうして、従姉二人が良縁であると断定を下した女、それが新治の現在の妻である。

『おい、俺は今晚穿井の處へ行つてくるよ』

新治が笑ひ乍ら云ふと、

『嬉しいね、戀人に會へるから。』

と妻も笑ひ乍ら答へた。彼女は夫と勝手の仲を人から聞かされてよく知つてゐた。

『判つたことは云ふだけ野暮だ』

おひ捨て乍ら、新治は家を出た。外は強い風のため、砂塵が渦を巻いてゐた。その砂塵否、お埃りを頭から浴び乍ら、新治は獨り道を急いだ。

部落。○ 追來て……此邊だつたが、さて何着だつたか知ら。……思ひ乍ら眺め



廻してゐると、ドアを開けて安井の小さい子供が出て来た。

「ハロー、ボーイ。パパアが居る。」

「ノー、パパア居ない。」

問答をしてゐると、勝子が出て来た。

「まあ新さん、久し振りね。お変りないの。」

「あゝ、有難う。」

「ミセスは。」

「お蔭で。安井さんは。」

「墓を遊びに行つたわ。」

「僕、今日一寸用があつて来たんだがね。」

さうした一通りの挨拶がすむと、二人は對ひ合つて座つた。

新治が良一と二人で、この前に訪問してからもう半年になるだろう。それから三ヶ月程して一度、路で勝子に會つて一寸挨拶したきり、今日まで會はなかつた。共に同じポストンに住み乍ら、二人は減多に會はなかつた。

「ポストンの生活には、もうあきくしたのね、兄さん。此頃一世の人達迄澤山アウトサイドへ出て行くのね。無理ないと思ふわよ。ポストンに永く暮して居たら、人間は腐つてしまふはね。兄さん、特に子供がとても悪くなつて本當に困るわ。私達だつて出て行きたいんだけど。」



三人の子の母となつてゐる勝子。然し、新治に兄さんと呼ぶ彼の女は矢張り十年前の勝子と同じ勝子なのだ。だが、十年前の勝子に比べて、今はずつとよく肥えて別人のやうに見えるが、ぢつと見て居ると、矢張り二人が戀した時代の面影が残つてゐる。彼の女の明るい微笑<sup>ほえ</sup>んでゐる大きな瞳に、あまい物の言ひ方は昔のまゝである。

「全く此頃随分外へ出るね。」出ない。出ない。と頑張つて居た一世の老人組の出て行くのが特に目立つね。「うまい酒を思ひつきり飲んで、好きなギャンブルを遊び、さうしてたまには女も買ふ。つまり命の洗濯をする爲に、この殺人的な暑いポストンに暫しのおさらばを告げるんさ。六十に手が届く此の歳になる迄、金を残さずに氣儘な生活をして来た俺は、今更金が欲しくつて出て行くんぢやないよ、ヤング」と、僕の知つてゐる一世が、さう辯解しても付かないやうな事を云つて、シーズナル・ウォルクでユタウ方へ行つたが、偽らざる告白だと僕は思ふよ。不自然な社會、生活に對する大きな刺戟もなければ、將來に對する希望もない、文字通り籠に入れられた鳥のやうな遺瀨無い生活を續けて居ると全く人間は腐るよ。成長してゆく人間に必要な事は美しい夢の世界を心に描くことだ。若い人々の生命は夢だ。その夢を見ることのできない、こうした社會から二世の若い人々が脱け出して行くのは寧ろ當然だと僕は思ふ。それは兎も角、ポストンは若い人々にはとても悪い社會だと僕は思ふなあ。仕事に身が



入らない。上の者が其の悪癖を矯正してやらうとして、注目的な叱言を云ふ。

「エッ、もう止めた。十六串でこれ以上働く馬鹿か居るか。」と尤もな理窟を云ふ。食糧とルームはフリーで提供されて居るから、毎日遊んだ所で、その方の心配はない。また、仕事をしようと思へば、すぐ他の仕事口が與へられる。

こうした社會では、若い者は不知不識の中に責任觀念を失ひ、苦難に堪へて、それを突破してゆくといふ忍耐心と、努力しようといふ強い意志の力をなくしてしまふ。戦時下の不自由勝な社會に出て、色々の困難に打ち克つて自分の生活の道を展ひてゆくといふ事は、若い人が将来大成する爲にはいゝ事だ。之は僕一人の考へぢやなくて、多くの一世の考へだと思ふ。さう思へばこそ、可愛い戒子を手放す大きな危懼を抱きながら、敢て出してやるのではないだらうか。

人は次から次へと出て行く。一万の人口が六十に落ちて居る。行人人を見送る度に、僕は袖を引かれる思ひがする。だが、僕等のやうに家族のある者には、獨身の人や、若い者のやうに簡單にはゆかないので悩みがあるよ。

悩み、十年前にも悩みがあつた。當時の二人の悩みは遂げられぬ戀の悩みであつた。今日も亦、二人は同じ悩みを悩んで居るのである。だが、今日の彼等が十年前と變つて居るやうに、彼等の悩みの性質も全く異つて居る。

「こんなキヤンプで二年も暮さうとは思はなかつたわ。でも、今は子供達も大分大きくなつたから少しは樂になつたけれど、来た當時、私、ほんとに泣い



たわ。

二人が別れて以来十年。二人だけでこゝしてゆつたり話すのはこれが始めてだつたが、新治も勝子も過去の事に就ては一言も觸れなかつた。二人はそれより前の、兄妹のやうな親しみを以て話して居た。しかし、勝子も新治も昔を忘れては居なかつた。相對した二人の瞳はそれをさゝやいて居た。だが、十年といふ歲月の流れば、二人の心の中に燃えてゐた情熱の炎を、いつしか消して行つて、その代り、冷たい理性の光りが二人の心中を導いてゐるのであつた。

幸福さうな勝子を見て、新治は……勝子の爲にはこれでよかつたのだ。……さう感じ乍ら、

「では、安井さんによろしく。」

と、おつて再びゲスト・ルームの中にその姿を消した。愛児、……浄が待つて居るだらう。……さう思ひ乍ら、子煩悩な彼は家路を急いだ。(畢)

一九四四・六・一三・一





外川明

ひっそりとした午下り。

食堂の裏のへちま棚の下で、かきこそと物音がするの。そつと覗いて見たら七八歳の子供が三人。一生懸命に向日葵の實をむしり採つてゐた。傍には、すでに裸にされた大きな蓆掌が、恰度蜜蜂の巣の内壁のやうな肌をまざ／＼と見せて二つ三つ轉つてゐた。何か知らんツーンとわびしいものがこみ上げて来た。もうかうして草も實を結ぶ時が来たのだ。暑さも酣つ七月ではあるが、秋は静かに近づいて来るのだ。此處に移されてから二度目の秋が……。

子供達は、何時果てるやも知れぬ大きな戦争の事など少しも心配せず、インデアンの子供が如くに眞黒になつて、かうして此處の自然の中に溶け込んで成長してゆく。それでいゝのだ。それでいゝのだと思ふけれど。何かうら寂しくなつて来る。メロンの種子を糸に通して首飾りにしてゐる女童など見かける時、一入ちびしくなつて来る。

やがてその子供達は、ポケット一ぱいに向日葵の實を詰め込んで、ピーツ、ピーツと笛を鳴らしながら向ふの白揚の緑蔭へかくれ去つてしまつた。足下の床板の下で、ジジジとこぼろぎが微かな音を立て、ゐた。(去年の日記帖より)(終)



文藝  
協會 水無月歌會詠草集

永瀬 勇選

順序不同

ネブラスカ

赤星 さと

母の日の朝早く起きて祈り居れば教會の鐘しづかに鳴りいづ。  
温室のテーブルの端に子猫等は親のなすがに臥みがきをり。  
國のため散りたる兵の弔ひの花米國旗造りつゝ夜半に及びぬ。

貴家 しま子

老いそめてわが未熟さを悟りぬるこの寂しさに餘命果てなむか。  
司會者の式はじめますにまだ見えぬ君をきづかひ友にさゝやく。  
皿の肉いたぶかむとしてためらはる今朝首のなき豚を見しかば。

矢形 溪山

一生の契りを祝ふ式なれど驕れるは時局に添はずとし思ふ。

期するもの心にもちて敵國人と吾れ等を呼ばふ所外に出むとす。  
覺悟成りて今日を旅立つ吾が上に晴れてくまなきアリゾナの空。

児玉 なを

胸を披き語るに親しき友なりと吾は惜しめども君は行きますか（Y氏に）



讀みなづむ文字のありて友の前に感謝状はよみつゝ吾が面羞し。  
電燈のおぼめく光は遠く望て闇に歩めり一哩のみちを。

永瀬正臣

はつなりの茹子のつぶら實露もちて光れる見たりしげり葉のかげに。  
碧水のそこを知れぬと見すかせばこゝだ棲まへる輕動く見ゆ。  
月の夜の水辺になては穗に出でし蒲さはがせて夏の風ゆく。

升谷千代

五百重山四方を圍へる此の沙漠に老いくちなむか我が同胞は。  
吾集を受けて俄かにうちしづむ吾子の面持ちよ思ひおほからむ。  
出征を厭いなげかふ子にさこそす吾れの言葉の時にまどふも。

大空魁

草原をよぎり吾がゆけは野菊より白き胡蝶の舞ひ上りけり。  
除虫剤なきを先い人はかこちつゝ虫捕りてをり茹子の島に。  
大翼白きさしのべて鷺一羽蒼空を高く飛び渡りゆく。

鵲湖綾織謙介

夕日光あはく残れる野おもてに声の透りて鳴くヒバリあり。  
蘭草生をひたに飛び来し白き蝶漂ふがにも庭に舞ひをり。

山裾の藪に朝なすな鳴く雉は巢ごもる雌を守りてかなくらし。



朗和朝喜旭山

今一と眼征く予を見むと伸が上る親の姿に涙誘はる。

出征に間述くなりし男の予等は再び此處に歸り来る多し。

所外ゆまし音信に迷ふひ女子は母にをきてこゝを出でむとす。

デンバー 安井 静 女

若くして逝きし先驅者の無縁塚心たふとみ清めまひらすも。(メモリアルデー)  
大御手にまかせまつりてよき日またん神のみわざにあだしなれば。

柳本 錦子

離れ住む吾娘ゆやさしきたよりありて心の憂ひやゝに和む。

すこやかに面輪ふとりてゑくぼさす吾娘のうつしゑ今日届きたる。  
しましとし傘ささず来て照り強き午後の日中に眼くらまむとす。

鈴木 緑松

宵更けて皓皓と照る十五夜の月我が假宿をくまなくてらす。

書をよせて何學子ふやと人間は吾が敷島の道と答へん。

川口 靜洋

いぬがたき今宵なるかも窓にさすさやけき月に思ひすみつ。

天井もなきこの一部屋のかりやども花を活くれば足らふ思ひあり。

み戦うたてとなすべき子のなきはまさりてさみし君也知るらめ。



紫の朝顔の花日をつぎて咲きにぎはふもかり庭に。

歐洲の大侵略戦はじまりぬと興奮<sup>たかぶ</sup>るレデオの放送きぬ。

侵略戦のニエースきかむと爲<sup>な</sup>すべきもかへりみず吾れはレデオの前に。

永瀬 勇

日ヶ出前の庭の涼しさや眼に沁みてシヤスタデージの白き群り。

鉢に似し茶藨う浮ける印度茶の黒きをかけて飯食まむとす。

去就成りて此履巾出でゆく人見つ、残れる吾れの思ひに沈む。

## 作歌に志す人々へ 人後記Ⅰ

日曜日はどうも集り事が多くて、行き度いと思ふ歌會へも却々行く事が出来な  
い、土曜日にでもして貰つたら何んとか都合がつくと思ふ、と言ふ三四の歌友の希  
望を、其れとなくきかされたので、先月の歌會席上集つた人々と協議の結果、其れで  
はその人達ちの希望を入れて六月から毎月最終土曜日に歌會を持つ事にしよう  
と一決、其の第一回を去る六月廿四日土曜午後二時より廿七・七・Aで催した、  
併し出席者は矢張り同じ顔ぶれで、日曜であらうと、土曜であらうと来る人は未  
来ない人は来ないのだと云ふ事をはつきりと教へられたわけである、時日の云々な  
ど只其の時の挨拶の口實にしか過ぎなかつたのであつて結局は其の人各々の態



度の問題だと思ふつまり何處まで作歌に對して熱意を持つてゐるか云ふ事である。大抵の場合半年が長くても一年も續けるともう倦怠を來たして自然に作歌から遠ざかつてゆくのが大部分であるが、斯う云ふ人々は他の事例へば川柳をやつても俳句をやつても、何をやつても永續性の無い事だ論である、前に倦怠を來たすと言つたが、其れは自分の作歌態度が偽りだらけだから、さうなるのであつて倦怠を來たすと言ふより行き詰まりを生じて作が出来なくなるのである。半年か一年位は他人の作品を模倣してでもどうやら續けられると思ふが、其れも種が切れてしまふともうすつかり出来なくなる。此れ即ち作歌態度の上に偽りはあつたからである。作が良し悪しは別として日頃から熱心に自己の作品、つまり自分の心から成る作品を練り上げる事につめて來てゐる人にはこの心配はない、時により低調になつたり、散漫な作を發表する事はあつても全然止めて仕舞ふと云ふが如き事はないと云はれる。諸君も知つてゐる如く短歌にしろ、何んにしろ、對象の音から歌に詠んで下さい、と言ふて來るのではない、作者自身が進んで對象を求めて其れを練り上げて歌に詠むのがこれが藝術なのである。よく歌が生まれると云ふ様な事を云くが、口で言ふ如くさう容易く生れるものではない、生まれるまでには矢張り生みの苦しみと云ふものが伴ふのである。生みの苦しみ所謂日頃の努力、修練を意味するのであつて、この努力修練を怠らず續けてゐる人にはじめて立派な作品が生まれるのである。私は別に歌會に出席しないからと言つて其の人



達を責めろつてはいいが、本當に短歌でも研究して見やうと言ふ考へのある人であるならば、歌會などにも覗いて、自分の作歌に對して持つてゐる信念なり、疑問なり、を披瀝してお互に教へ、又教へられしてこの道を研究してゆく方がもつと効果があるつてはなからうか、以上言はでもよい事ではあるが、一寸老婆心を起して言つて見たうである。

(終)

## 近代名家作品抄

松村 英一氏

防風の簀を立て並めし磯の烟そら豆はまだ多くみづらす。

耀きて燃えあがり来る底力一つ力は國ぬちにとほる。

電燈のともしし時に取り散らす紅きもの見え室に人あらず。

植松 壽樹氏

暖まる鉢の土より物の芽の萌えいづろなす生るゝ蚊とんぼ。

幹深く食ひ入る蟲の嚙む音すいかなる餓鬼のなれのはてにか。

半田 良平氏

彼岸より此岸にうつり来たる瀬の眼にさやさやし冬の川みづ。

廣きひろき冬の裾野の片隅に土に即くなす大宮の町。

露出せる焙岸のかげに湧きいでて靈ぶる水の止む時なしも。



## 選後隨錄

雨降れる空を鳥の群れ行くを黒雲の彼方に見えずなりぬ。

作者は或るひとつの景を捕らへて、其れを克明に描き上げむと努めてゐるのであるが、どうも此れだけでは未だ成功したものと云はれまい、勿論内容も簡單なものであるから、其う深いものも望まれないと思ふが、描寫するにしても、もう少し手際よく曲かないものだらうか。三句から四句の間、あまりにも澤山の言葉が省略され過ぎてゐる様に思ふ。下句の「見えずなりぬ」は何故斯ふ字足らずにするのか「見えずなりたり」ではいけないのか、其れから今一つこの作者について言ひたい事は、君は寫生と云ふ事を唯字義的のみに解釋して、心の寫生と云ふことを忘却してゐる様に見える、其れだから作品がつねに表面的であり、説明的になり勝ちなのであらう、潜越ではあるが若し君のこの作を添削する事を許して頂けるならば、「雨の中を寒くぬれつゝ飛び行きし鳥はつひに黒雲くもにかくりぬ」とでもしませうか。

訪ぬべく風の夕べに出で行くをためらひをれど吹きやまぬらし。

此の歌の作者は私の知つてからでも既に三年の作歌經驗を持つ人であり、熱心な作家だけに、作の上の進歩も眼に見えるものがある、と心ひそかに喜んでゐる譯である。右の一首、此の作には少々難がある様に思はれる、先づ句々の斡旋に上、下、したところがある様だし、其れから「ためらひをれど」の「ためらひ」はこの場合適切な言ひ方で、



ないと思ふ。此の歌意は『風の止むのを待つて友を訪問しやうとしてゐる』のであるが風は却々止みさうにもない』と言ふのであるから、其の通り順序を追ふて詠み下して行つた方が素直で良いと思ふ。例へば『風なぐをまちて訪はまく吾が居りつたべとなれど止むけはひなし』と云ふ様にしたら何うであらう。

### しめやかに告別式の席にゐてツラツクの音つれなくぞ聞く。

此の初句『しめやかに』は少し言ひ過ぎた感がある。告別式であるから誰も其うはしやいで居る者はないと思ふ。ひっそりとして、心悲しい沈黙の續く中に時折リ遺族の方々のすうり泣くけはひがきこえると言ふのが、大抵の告別式の情景である。だから『しめやかに』と理る必要はないと思ふ。其れから第四句目の『ツラツクの音』であるが、『音』だけでは一寸受け入れ難いところがあらう。もつと『音』の何んなものであつたか。讀者に解る様に言はなくてはいいまい。其れが出来てはじめて『つれなく』と云ふ作者の主感語も生きて来るのである。原作とは少し姿の變つたものになるが、次の様にでも詠まれたら何うかと思ふ。勿論愚生一人の好みに傾き過ぎてゐるかも知れないが、一寸参考までに、『葬式くわいしきのありとは知らずつれなくも大きな音ひがせてツラツクは過ぎぬ』愚生一人の好みを強ひるのではない事を諒解して頂きたい。

### 暗き所にゐるも蟋蟀夜明けしを知らで鳴くかと床にゐて聞く。

此の作は他の或る作者に比べて當然採つても差支えないと思ふが、この作者は既に廿年からの作歌経験を持つ、言へば吾々の指導者格たるべき人であるので、



其の人の作としては少し物足らぬと思つた故に頂くのを遠慮したわけである。先づ問題となるのは初句の『暗き所』であらう。此處はもう少し具象した表現が採れなかつたものであらうか、第五句で『床にゐて聞く』と作者の位置を示されてゐるので、其處から察するに此の『暗き所』は矢張り同じ部屋の内の、荷物の蔭か、クローゼツトの隅かであるのであらうが、然し其れはこちらから好意的に解釋したまふであつて、讀者の皆が全部斯様に解釋して呉れるか、何うかは疑問である、其處がこの作の一とつゝの難点であらう。其れから『夜明けしを知らず』であるが、此の句に對しては他の歌友も疑問を抱いて居られた如く、少し穿ち過ぎた物言ひを許して頂けるならば矢張りこの句聊か獨斷的だと云ふ感があると思ふ。尤もこほろぎは夜多く鳴く出ではあるが、係し晝の日中にも鳴いてゐるのを屢々きく事がある。例へば眞晝、野の藪の中とか、塵捨場の蔭とか、或ひは又部屋の内でも鳴く事がある。だからこの『夜明けしを知らず』は少し理智的になり過ぎてはいないだらうか、此れ以上愚生の贅言を費さなくとも既にこの作者は何を求められて居るか云ふ事を氣附いてゐて呉れてゐる事と思ふから此の位でつまりぬ事は言ふ必要無いと思ふ。

### つぎつぎと追はれきつるも今こゝに花さす道をのぶるうれしさ。

此の作者は歌會には既に度々出席されてゐたのであるが、出詠されたのは今回が初めてである。併し一連の作品皆良く整つてゐて既に作歌には或る程度の経験を積んで居られる事が察しられ、良き歌友を得たと心ひそかに喜んでゐる者で



ある、扱て右の歌「つぎつぎと追はれきつるもの」の意、良く解らない憾みがあると思ふ。下句から察すると自分の事の様であるが、上二句の言ひ方から受ける感じは第三者も含まれてゐる様にみえ、つまり自分も、人々も次ぎから次ぎと、云ふ風にきこえるのである。歌會席上での作者の説明は、此れは矢張り自分の事で、「つぎつぎと追はきつるもの」の意は集合所から轉任所と云ふ工合に度々々住所を移されて来た其の自分が今こゝに、と言ふのださうである、其れならば「つぎつぎと」の言ひ様一寸適切を缺いてゐる様に思ふ。勿論次ぎから次ぎと移されて来たのだから此れでも差支えない様なもの、此の場合「幾度か」と言つた方良くはなからうか、其れから下句の「うれしさ」の主眼は、出来得る事なら内に潜めて餘韻として讀者の胸にひびく様に詠みたいものである。例へば潜越ながら「幾度か追はれ来し身の今日こゝに花活くるすべを説く幸にあふ」と云ふ風にでも詠まれたらばと思ふ。此の次にある君の作「何事にもたしなみやゝにうすれ行くこの身」とまし五十路こえつゝは誠によく整つた作だと思つて拝見しました。自分と云ふものを内省して其處から湧き上つた感情を、捕らへて手際よく表現されてるところ、好感をもつて味ふ事が出来る。選歌の方へ頂いてよかつたのだが、君には他にも良い作があつたので其の方を頂き、此の欄でこの一首は榮表させて頂く事にした、悪しからず御諒承を乞ふ。

曇 評 多 謝

永 瀬 勇



# ポストン俳壇

## 俳句四季雜詠

和氣湖月編

初夏や出所のバスに人の波 ミヅウミ 土屋天眠  
 軒下に綱張る蜘蛛や夕映ゆる 全  
 水延むのろき細や草いされ 吉里竜耳  
 ローン列るや松の落葉のしたかに 全  
 外泊の蚊帳そこはかや森静 全  
 訪ふ人の稀に庵まゝ真裸 全  
 クラの風前に後えにメス涼し 全  
 鴉の仔日盛りの道とぼく 全  
 蝙蝠に目を遊ばせて端居かな 全  
 西瓜つを日焼けし腕の逞ましき 全  
 夏草や仔馬は兎角後れ勝ち 関 五松  
 裸子を母追ひ廻す暑さかな 全  
 野馬荒れし甜瓜畑に人惜み佇つ 全  
 草除れば一椀に飛べり蛙の子 全

入替子と圍める卓の類四 全  
 甜瓜摘める袋室たくおしけり 全  
 新涼や木蔭につどい寫真撮る 全

矢形先生を送りて

師と別れ淋しくたどる柳の野 全  
 披らく詠に師の名懐かし夕涼 全  
 童の腰のみ残り日焼かな 上塚隠居  
 日焼の児裸のまゝに球遊ぶ 全  
 忍び寄り高鳴く藁を見たりけり 全  
 浴衣着て葵に佇てゝ妻若し 全  
 此の家娘すくく伸びぬ蜀葵 タケイロイ 和氣湖月  
 此の家娘無表情なり蜀葵 全  
 此の家娘化粧嫌らえり蜀葵 全  
 咲き登る日々の花あり蜀葵 全  
 庭の樹々今暮れんとす白葵 全  
 汗ばますうつと高きタイピスト 全  
 羅に汗でぐくくタイピスト 全  
 微笑こぼす涼しき瞳タイピスト 全





選

句集

(モハベ誌抜萃)

和氣湖月選

ソートレキ 左右本章城

飼ひ鳩の肩に来て居て春の人

煤よこれして服の冬逝かんとす

ヒラ

櫻井銀鳥

オリオンに暈をひろげて春の月

このメスウニツブノ打ち鐘涼し

五十住静遊

雲を添めて彼岸太郎の真がやき

優婆塞のたえなる司令花祭

篠田香虎

警署の明き灯や明り易き

岸洗ふたゆたふ波や青嵐

安川不似郎

霸王樹のつや／＼赤き花したく

クローラーに帳遊ばせて晝寝妻

小田華泉

真四角の畑一ト切れ葱坊主

鯖酢や隣りも同じ國訛り

小島静居

虞美人草を無縁佛に手向りあり

氣安さや外寝の蚊帳に聲かけて

吉里竜耳

架け置きし柳丸太や芽を吹ける

草茂る畑の農具は錆さうし

関 五松

崩れ行く危き堤の新樹かな



野良犬も細打つ人も陽炎へる

山根愚心公

萌へ出でし庭一面の葦草

青嵐や垣にかゝれる紙の屑

柿瀬正美

朝や出や被女の緋みれスウエタ著る

水滸や濯ぎ物する獨り者

田中白水

青庭にしたゝか夜部の馬蹄跡

四維にすぎぶ沙漠の埃り風

上塚隠居

手の空に貫ふて蒔けり花の種子

高々と家の前なる新樹かな

山北凉水

蝶々のまつばるまゝにバスに乗る

新緑のキャンブに續く野菜畑

大西桃李

行く春を窓に倦れて惜みけり

青嵐や輕おどろいて沈みける

大塚愛石

鋤き了へて先づ一服や風薫る

青東風に壁打つ榆や法話聞く

アマテス 中村梅史

風薫る床に坐りて機嫌よし

横山亀村

杜抜けて汗ばむ肌や風薫る

渡り鳥

坪程の庭いづばいに日本風

チカゴ 渡辺けさる

仰ぎ見る顔の陽ざしや若みどり

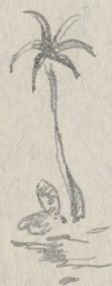
和氣湖月

薫風や顔を竝べて柵の馬

千人針求む母あり木の芽庭

人々

(終)





## 古川柳句解

島原潮風

○錄足へまっばだかにていとまごひ。

句解 錄足は唐の太宗から贈られた名珠を讃岐の志度の浦で龍宮へ奪ひ取られた。でその海人小女に命じてその珠を取り返させやうとした。小女は命のままに海中に飛び込んで名珠を取返したが、遂に絶命した。さて出葬に臨み眞裸のままて錄足の前へ出てお暇乞したのであつた。あゝこの生別はやがて死別であると思ふと、誠に可愛さうであるが、又一面にはその状態がおかしくも見える。諸曲や淨瑠璃から出た句。

○奥右衛門は見せものに出す思案もし

句解 奥右衛門はもと絹川谷藏といつた。その妻累と共に下總の殖生村に行つたが、山名宗然等に逮捕されるのを惧れて奥右衛門と変名した。そ



れは何故かと云ふに、絹川は足利頼兼の抱力士であつたのに、頼兼の執権仁木某、管領山と興みして、頼兼の遊蕩に耽るを利用し島原の愛唱高尾に懇溺させ、その失徳を名として天下の権を奪はふとの密謀を聞き知つて、頼兼の爲を思ひて高尾を殺したからである。累は高尾の妹で美貌を以て鳴つたもつたが、高尾は絹川に對する怨を以て、その怨霊が妹に祟り累をして二目と見られぬ醜女と変せしめたのである。與右衛門は見捨てるに忍びず、寧ろこの窮状を免れ且は金儲になるかうと見せ物にしやうかと累条を廻らした事もあつた。

○美濃の尻を近江の人にくさがらせ。

句解 美濃と近江の國境は山河の隔りもない平地つゞきで、人家が接近して居る。そこで夜中寝るつゝに美濃の人のお尻が近江の人の鼻先になる故、放屁をしては臭がらせて居る。寝物語りとは違つて有難迷惑であらう。

◎次回川柳課題

(終)

「裸」	締切 八月十日	選者 未定	三句吐
「死線」	締切 八月十日	選者 未定	三句吐
「運」	締切 八月廿日	選者 未定	三句吐
「見榮」	締切 八月廿日	選者 未定	三句吐



第四十二回川柳句會

課題「新調」市川土偶選

佳調

卒業の晴着みんなの目を集め 汀村  
新調のビュロが目立つ廣い部屋 軟葉  
新調も着る事もなく二年過ぎ 一水  
新調の服へ躊躇ふ土埃 里江  
新調の調度も出来て待つ吉日 天眠  
新調の家具に落ちつく婆の風 光葉  
吉日も決り晴着の衣紋掛 一水  
新調のスーツを妻に見直され 一流  
新調の窓が明るい調度品 笛水  
新調の器具へ目につく指の跡 閑水  
娘の晴衣鏡の中で微笑でるる 春山  
派手過ぎ柄へ若妻小さく居る 丘上

五考

spicnspan, new

新調へ縁遠く居る子澤山

秋月

今着せて新調泥にして帰リ

瓢池

新調は婆の事なり継ぎハンツ

白水

産衣縫ふ妻を勞はる配給着

笛水

マチス摺る癖ためはすニユー。ンツ 閑水

人

新屋軟葉

陽焦した顔が目につくニユーハット

評 陽に焦げた顔とニユーハットを對照

して見ると、所外からたんまり儲けて来

た事も想像される。時節柄目につく

句である。

地

北村子守

ニユー。シユース抱いたまゝにて子は眠り

評 明朝登校日でもあるか、美しい夢を

見て居る事であらう、真純なる子供

の気持が餘蘊なき迄必み出てゐる。

天

斎藤一流

新調と氣づく女の目が敏い



評 新調であるか、縫直しであるかは大き

つばな男では判らない、織細な所迄鋭敏

に働きを見せるのも女である。

氣づくの一語がよく利いて居る。

自吟

娘の晴着後をぞろ／＼ついて来る。

選・後・感

皆様の力作に加筆して選をした事

を恕して貰ひたい。實は題が悪かつ

たのか、題をうまく消化した句は見當

らなかつた。題の選擇の如何によつて

句の出来、不出来のあることは皆様

は既に體驗済みのことと思ふ。只御

願することは題即ち、新調なら新調

とおはず表現するやう作句の練習を

して欲しい。

(終)

to get used to.

第四十三面川柳句會

課題「なれる」

上野銳実選

天

藤井孫六

追へば追ふ丈けしか逃げぬ馬となり

評 此の馬は恐らく野牧のもので、

あらうか、人間が害を加へるものでは

ないと分り飯々と人にも追付いて来て人

なつてゐて居る経路を巧まざる

中に詠んで居るのがいい。山は上五にあり。

地

村上一水

口癖の愚痴にもなれてもう二年

評 立退き強要に對する愚痴は諦め

ても諦め切れぬものがあり、殊に女人の

愚痴と来たう二年のものは何年でも、

此状勢の續く限りは絶へぬものと知る

べし。下五により馴れるを確定的

のものとした。

人

星野光葉



物足らぬ儘になれ行く假住居

評 衣食住の保証はありとは云ひ條何  
かしの物足らぬ柵内生活、さりとして  
如何する事も出来んやが吾々の現状  
である。従つて不足勝の心のまんま  
假住居にも馴れて行く。

軸

たまさかの妻の料理は口に媚び。

五 客

メスの鐘皆聞分ける元二年 閑水  
住みなれた暑さを凌ぐ智慧も出来 緑松  
貧しきになれて十六吊が足り 春山  
住みなれる此處もカボチャの出来のよき 緑松  
柵の中なれて氣になる娘の寝 秋目

前 拔

暑さだけまだなれ切らぬ三年目 牧東  
環境へ慣れて居残る吐を極め 全  
タイピストなれた頃には嫁の口 光葉

なれた國餘儀なく帰る船を待ち

隣の子だまつてドアを開けて来る

國訛りなれない内の耳ざはり

二年越しなれた手つきのデシアップ

百幾度住めば都の風も吹き

まだなれぬ妻を勝はる物仕事

安速になれて所外が恐く見え

征つた手の見なれた顔が夢に浮き

理窟よりなれた手付きの中が利き

環境になれてはならぬ氣の勵み

粗食にもなれてめつきり元氣づき

ならされる奸馬の鞭に陽が正面

花に木になれて戀しい沙漠町

なれて見りやあの謔面も好か男

以 上

両先生の御選を頂いて欣びとするこ  
ころであります。依つて柳人諸氏は尚一  
層精進あらん事を願います。(潮風)

孫天

全

桂馬

閑水

全

鏡水

春山

軟葉

全

一水

一流

笛水

孫六

瓢池



# 第三十二回紙上互選入選句

## 課題「有効」

入点

- 9 廣告の心理に動く客の數
- 8 有効に十六時を妻の智慧
- 6 打ち込んだ最後の釘が物を云ひ
- 5 溢々と買つた藥の効に笑み
- 5 効くと云ふ暗示を入れた灸を据へ
- 5 下熱劑効いて安堵の胸を撫で
- 5 有効な期限が切れて只の紙
- 4 汽車で来る子供に行先の札が付き
- 4 今の苦は無効にならぬ平和の日
- 4 効くと云ふものは試した病みより
- 4 レーシオンを捨てるに惜しい靴を買ひ
- 4 過去の汗生かして次の世に備へ
- 4 廣告の効め信じた藥瓶
- 4 有効に使って生きる金の價値
- 4 適材を適所に使ふ人の價値

光葉 軟葉 五松 貞澄 笛水 汀村 虎山 溪山 綠泉 浪音 笛水 孫六 竜耳 光葉 全

- 4 捨水で綺麗に育つ花の垣
- 4 利目ある話蛇まで食つて見る
- 4 有効に聞いてビタミン買つて見る
- 3 明日迄と云ふてチケット大事かり
- 3 玉碎が有効だつたあの試合
- 3 有効に時を費す氣の配り
- 3 古板も何かにならうとつて置き
- 3 切れ端を寄せて作つた敷布團
- 3 もう一度有効藥と云ふを買ひ
- 3 往復の切符へ急ぐスヶジュール
- 3 風藥廣告通り母に効き
- 2 古箱も変つた美術展に見る
- 2 有効の期間に帰る汽車の旅
- 2 有効に生きるに迷ふ柵があり
- 2 體験は無効になるまい新天地
- 2 有効に鍋墨塗つたギョフ劇
- 2 破れ箱利用の椅子へ褒め言葉
- 2 古パンツ形變つて坊がはく

春山 閑水 貞澄 一流 貞澄 天眠 桂馬 全 五松 溪山 全 浪音 綠泉 孫六 全 次彦 軟葉 春山







- 3 心得て居てまごつく登録日  
 3 其の点は心得たりと胸を打ち  
 3 征くと女小息に女みきかす母心  
 3 心得た妻のまごつく勝手丸  
 2 嫁ぐ朝までも心得母は説き  
 2 心得て出所行李巻いて居る  
 2 場になれず心得一寸を感し  
 1 心得て妻は着の用意をし  
 1 心得が芽を出し遂に口を出し  
 1 心得を旅では棄てて獨り者  
 1 不心得を察めて悔なぬ妾の顔  
 1 老人に席をゆづつて己れ立ち  
 1 心得に欠けて満座で顔を濡れ  
 1 旅に出る子に一々と女みきかせ  
 1 心得て居て人道を踏みはずし  
 1 田舎出の客と女給の世辞もよし  
 1 心得て居れど欲心には目が暗み

里江  
 為仙  
 漢山  
 全  
 牧東  
 緑松  
 曉鐘  
 大海  
 曉鐘  
 全  
 幽香  
 勇  
 晚香  
 為仙  
 時子  
 浪音  
 全

(終)

## △原稿募集△

一 ポストン下最も感銘を受けた事。

二 我ブブラックの誇り。

### ▲募集規定▲

▲右一二条一行十七字語。十行用紙六枚以内。

▲原稿締切 九月二十五日。

▲原稿には住所氏名を明記して下さい。

▲宛名はポストン文藝協會

POSTON POETRY CLUB,  
 UNIT 1, CITY HALL,  
 POSTON, ARIZ.

▲發表十月號

▲原稿は一切返戻致しません。

▲幾度原稿募集しても自由であります。

▲▲創作。隨筆。

詩。短歌。俳句。川柳。其他の

原稿締切は毎月廿日限守。



## 編輯後記

▲七月號は豫想外の好評を以て迎へられ、發行後僅か三日間で一部をも餘す事なくお懐入をしてくれ、育て上げた私共をして寧ろ面喰はせた程であつた。再版不能である爲、其後の御申込を謝絶しなければならなかつたので、

皆様に對して甚だ申譯ない次第、殊に今回から配布組織を改変し、準備が充分出来ない裡に配布したので、本誌後援者並に旧愛讀者中オミツトした人があり、それらの人々に對し茲に深く、御詫が申し上げます。

▲印刷所の中島、山越両氏を格別、青年諸君が非常な努力を拂つて下さつたお蔭で、美しく印刷が出来、愈々聚本といふ時になつて、第五十九、六十

の両頁の一束がない。百方手を盡して、搜索の結果、失踪した事が判明した。

印刷された紙でさへホストンに逃げ出すのだから、私共血あり涙ある人間が出て行きたくなろつは當然でありませう。結局島原氏が瀧井氏と健脚を弄らせ、急いで書いて頂き再版して雑誌に挟み込んだやうなわけ。

▲處が、一難去つて又一難、今度は八月號の印刷にとりかかつた處、原紙不良があること判明、又々四十頁と云ふ大部の原紙を瀧井氏に再び筆寫して頂いた。氏に對し茲に深甚なる感謝の意を表します。然し乍ら、案ずるより産むは多い。八月號も御覽のやうに血液に出来上りました。之偏に皆様御支援の賜物であります。厚く御禮を申し上げます。今日は三百部増刊しました。



*Compliments*  
*from*  
NATIONAL GROCERY CO.  
MESA, ARIZ.  
WHOLESALE  
*Quality Groceries*



"MARUSHO"  
THE FINEST SHOYU

SHOWA SHOYU BREWING CO.  
RT. 2, BOX 51, GLENDALE, ARIZ.

昭  
和  
醬  
油  
釀  
造  
有  
限  
公  
司  
アリゾナ  
グレンデール市





I WISH IF I HAD  
A BEST'S PIE

BEST'S CAKES  
AND PIES  
ARE ALWAYS BEST

Best Bakery

PHOENIX, ARIZ.



▲本協會に御寄附下さつた芳川積三

正本良文(五) 井上政次(五) 井國隆(五) 永井  
構山保善(一) 大池チエ子(五) 川崎雪太郎(五)  
正吉(五) の諸氏に對し感謝いたします。

▲愛讀者の爲の雜誌でありますから

どうか御遠慮なく、本誌に對する御注  
文なり御批判なりを寄せて下さい。

▲七月號は印刷と發行を急いだ爲に  
誤字を訂正することゝができませんでし  
た。その四五を茲に訂正して置きます。

第七頁十六行 赤白菊とあるは赤白黄

の誤り。

第七頁十五行 わむ佐の小路はわむ佐

の小屋。

第九頁十二行 撲つを實現するは實

演する。

第四十頁 一行 甘藷の花とあるのは甘

藷の蔓。

それから、有田氏の教育管見中島と

ありは鳥(カラス)の誤り。

▲寄稿家諸氏に御願ひ

(N・M)

私達は出来得るだけ多く、戦時下同  
胞生活に取材せるものを載せたいと  
考へて居ること。

2. 轉任所で發行する雜誌として種々の  
制約があり、華有當局の檢閲を受け  
てゐること。

以上二つの理由から、折角の御寄稿も  
御返還の止むなきものがありました。  
御諒解を乞ひます。

ロ・ホストン文藝

第二卷 第六號  
一九四四年八月號

編輯人

松原信雄  
有田 百

印刷所

ホストン印刷所

發行所 ホストン文藝協會島原潮風



*Poston  
Poetry  
Club*

UNIT 1, CITY HALL,  
POSTON, ARIZ.

